地質学雑誌　第109巻　第6号（通巻1293号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成15年6月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.6 No.6 June 2003

産業技術総合研究所 地質調査総合センター(旧地質調査所)発行地質図類の販売

【地 質 図 幅】1：50,000 地質図幅、1：200,000 地質図幅、1：500,000 地質図幅
【広 域 地 質 図】1：2,000,000 地質編集図、1：1,000,000 地質図・ほか
【各種シリーズ】数値地質図（CD-ROM）、活構造図、火山地質図、特殊地質図、海洋地質図、水理地質図、鉱物資源図、重力図、日本炭田図、地熱地域等重力線図、日本油田・ガス田図、空中磁気図など

ご要望によりカタログを差し上げます。
在庫切れ古書の取り扱いもいたします。

地質図・地球科学文献コピー代行
地球科学論文・文献の翻訳
地球科学文献検索
データの計算機入力及びワープロ入力
地球化学分析（XRF・EPMA）取次
その他地学情報に関連する事業、ご相談ください。

迅速・確実!!

地学情報サービス 株式会社 *GSIS*

代表取締役社長 垣 見 俊 弘

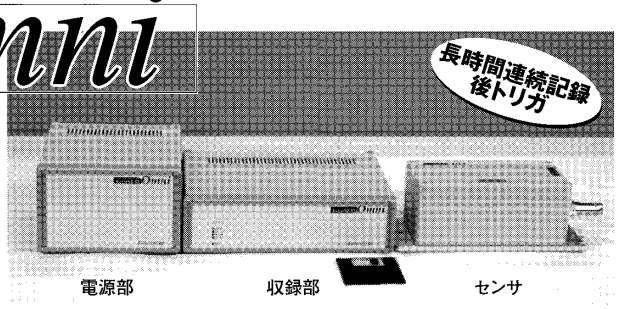
〒305-0045 つくば市梅園2丁目32-6
Fax 029-856-0568
Tel 029-856-0561
E-mail : gsis@kb3.so-net.ne.jp

Geoscience Information Services Co., Ltd.
Home page : http://www008.upp.so-net.ne.jp/gsis/gsis-J.htm

従来型データロガーの概念を捨てた ***ネットワーク時代の地震計***

Katsujima

アキュサイス オムニ
AccuSEIS *Omni*



1.ネットワーク時代の地震計

2.長時間連続記録、後トリガの実現

このことから 事実上欠測なし!! お手許のパソコンからできます

・トリガ記録で制約を受けていたプリトリガ、ポストトリガの制約が大容量時代到来で事実上無限大に

3.多機能A/D、多様な計測器との結合

4.進化したGPS時刻管理

仕様は予告なく変更することがありますので、ご了承下さい。

株式会社 勝島製作所 ISO 9001認証取得

〒125-0063 東京都葛飾区白鳥1-6-1
TEL03(5698)7111(代) FAX03(5698)7770 ※営業部までお問い合わせ下さい。
URL http://www.katsujima.co.jp mail webmaster@katsujima.co.jp

公示　2004年度役員選挙について

日本地質学会会員　各位

選挙管理委員会　委員長　坂本　正徳
委　員　小布施明子・塚本　　斉
手塚　裕樹・宮城　晴耕

今年度の役員選挙の立候補受付期間は，５月１日～５月20日でした．5月23日に第１回選挙管理委員会を開催し，会計監査委員および評議員の立候補者の受付を行いました．その結果をご報告いたします．

１．受け付けた立候補者は会計監査委員０名（定数は２年任期１名，１年任期１名），評議員は23名（定数は25名）でした．
２．会計監査委員の立候補者はなく，評議員の立候補者は定数を超えていないので，選挙は実施しないこととといたしました．選挙細則第２条12を適用し，評議員の補充は行わず，会計監査委員については会長に正会員の中からの委嘱をお願いしました．
３．下記の立候補者全員を無投票当選として，５月23日付けで会長に報告いたしました．

評議員（23名）

会田　信行（千葉県立佐倉東高）
阿部　国広（川崎市立西有馬小）
天野　一男（茨城大理）
新井田清信（北海道大理）
今岡　照喜（山口大理）
井龍　康文（東北大理）
上砂　正一（明治コンサルタント（株））
黒田潤一郎（東京大大学院）
榊原　正幸（愛媛大理）
柴　　正博（東海大自然史博物館）
竹内　　章（富山大理）
竹内　　誠（名古屋大）
中井　睦美（大東文化大）
仲谷　英夫（香川大工）
楡井　　久（茨城大）
髙本　　格（神戸市立飛松中）
平野　弘道（早稲田大教育）
松本　俊幸（国際航業（株））
宮下　純夫（新潟大理）
矢野　孝雄（鳥取大教育地域科学）
吉川　周作（大阪市立大理）
脇田　浩二（産業技術総合研究所）
渡部　芳夫（産業技術総合研究所）

日本地質学会*News*

Vol.6 No.6　June 2003

The Gealogical Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル　６F
編集委員長　高橋正樹
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

公示　2004年度役員選挙について …… 1

第110年学術大会　見学旅行一覧 …… 3

案内 …… 5
海上保安庁測量船による海底地形調査体験乗船参加者募集のお知らせ「第６回テチス浅海域に関する国際シンポジウム/第47回粘土科学討論会

各賞・助成 …… 6
平成15年度・第11回日産科学賞/平成16年度海洋地球船「みらい」個別研究課題の募集

公募 …… 6
東京大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教官公募/北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教授公募（2)/九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門公募（2)/核燃料サイクル開発機構平成16年度任期付研究員（博士研究員）公募

報告 …… 8
日本学術会議第18期第７回地質学研究連絡委員会議事録/日本学術会議第18期第７回地質科学総合研連会議報告/地学教育および地学普及の方策について/日本学術会議鉱物学研究連絡委員会（第18期，第８回）および鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会（第18期，第８回）合同会議　議事録/日本学術会議第18期第８回古生物学研究連絡委員会議事録/日本学術会議第18期第７回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録/日本学術会議第18期第８回海洋科学研究連絡委員会議事録/IGCPニュース2003

日本学術会議の改革の具体化案についての危惧（公文富士夫）
……14
科学技術総合会議調査委員会の最終答申「日本学術会議の在り方について」［概要］ ……14

紹介 ……15
白いヒスイ谷への招待　岡本真琴，工藤智己　著（田結庄良昭）
地中海は沙漠だった―グロマー・チャレンジャー号の航海―ケネス・Ｊ・シュー著　岡田博有訳（水野篤行）

新版地質図・報告書類 ……17
川前及び井出地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）
久保和也ほか（田中久雄）

学会法人化に関するワークショップ討議資料 ……18
付録１：総会，理事会，評議員会（常任代議員会）の関係
付録２：理事，代議員および評議員（常任代議員）の選出方法

学協会・研究会報告 ……22
IGCP－440国際シンポジウムとLEGENDS集会（吉田　勝ほか）

「青少年のための科学の祭典2003全国大会」開催

院生コーナー ……24
新潟大学理学部地質科学科・大学院自然科学研究科地球史セミナー（梅津慶太・武井雅彦）

追悼　山本　聰　教授を悼む（氏家　宏）……25

訃報 ……25

学会記事　2003年度第３回定例評議員会議事録 ……26
2002年度（平成14年度）決算（案）
2002年度（平成14年度）財産目録
2002年度寄付者および寄付内訳
2002年度（平成14年度）会計監査報告
2003年度（平成15年度）予算（案）

CALENDAR ……35

巻末　地質学雑誌への投稿の手引き
地質学雑誌における古生物記載法

表紙紹介

北海道駒ヶ岳の1942年割れ目火口

写真・文　**白尾元理**

北海道駒ヶ岳（最高点剣ヶ峰：海抜1131m）は，内浦湾の南側にそびえる活火山である．秋田・甲斐などの他の駒ヶ岳と区別するために，北海道駒ヶ岳，あるいは渡島駒ヶ岳と呼ばれる．北海道駒ヶ岳は約5000年間の休止後，1640年に大噴火があり，以来1694年，1856年，1929年に大噴火をおこしている．いずれも，数時間の地震頻発→プリニー式噴火→火砕流（軽石流）と進行し，数日で激しい噴火は終了している．最近では，1996年，1998年，2000年に小規模な水蒸気爆発を繰り返しており，近い将来にやや大規模な噴火が起こる可能性が高い．

写真は南火口壁の隅田盛（892m）から，北火口壁の砂原岳（1113m）をみたもので，手前には1942年の中噴火でできた割れ目火口が広がる．割れ目は長さ1.6km・幅30～100mで，右下の人物と比べると大きさを実感しやすい．割れ目の断面に成層してみえるのは，1929年の噴出物で，斜面にまき散らされているのは1942年噴火で放出された火山岩塊である．左上には，1996年水蒸気爆発のクリーム色火山灰がみえる．

広告取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

第110年学術大会　見学旅行一覧

前月５月号予告記事に掲載いたしました，見学旅行一覧に一部変更がありましたので，再度お知らせいたします．
なお，申込〆切は８月８日（金）です．多くの方々の参加をお待ちしています．（申込は静岡大学生協宛：各種申込用紙をご利用下さい）

※キャンセル料は申込締切後，出発3日前までは50%，2日前以降は全額となります．
※参加費用には旅行傷害保険料が含まれます
※案内書は費用に含まれません．大会期間中に会場にて販売しますので，各自購入してください．
※集合地点までの交通費は自己負担して下さい．
※マイカー方式の場合には車両の提供と運転をお願いする場合があります．車両を提供できる方は事前に連絡下さい．燃料費・高速代等は参加者全員で分担
※集合・解散の場所，時刻などの変更もありえますので，学会期間中は掲示等の案内に注意してください．
※参加者が定員の3/4に満たない場合には，見学旅行が中止になることもあります．

班番号	班・名称	見学コース	主要見学対象	期日	定員	案内者（＊：リーダー）	費用概算	地形図	備考
A	浦川周辺の中央構造線と足助剪断帯	JR静岡駅集合（8：00）→静岡IC→岡崎IC→香嵐渓→田振→大島→田口（泊）→東栄→浦川→阿寺→長篠→遠鉄・浜北駅（16：30頃）→浜松IC→静岡IC→JR静岡駅（18：30頃）	足助剪断帯の破砕?塑性領域の断層岩類（ウルトラマイロナイト，シュードタキライト，カタクレーサイト），中央構造線とその断層岩類（鹿塩マイロナイト，マイロナイト化した領家変成岩類），天竜峡花崗岩，マイロナイトの捕獲岩，設楽層群の基底礫岩，阿寺七滝礫岩（くいちがい石）	9/22－23	20名	道林克禎＊ 高木秀雄 大友幸子 酒巻秀彰	20,000円（昼食付き）	（1/2.5万） 足助，中部，熊，三河大野	１箇所で膝程度の渡渉あり．
B	天竜地域の三波川変成帯	JR静岡駅→掛川駅→天竜浜名湖鉄道二俣駅前集合（10：00）→阿多古→熊→白倉→秋葉ダム→天竜二俣駅（16：00頃）	三波川変成帯の泥質片岩，緑色片岩，砂質片岩，メタチャートなど	9/22	20名	増田俊明＊ 田切美智雄 安藤　伸 落合達也 谷本一樹	3,000円（昼食つき）	（1/5万）三河大野，天竜，佐久間	マイカー方式
C	掛川地域の鮮新－更新統前弧海盆堆積物の層序と化石相	JR静岡駅集合（8：00）→相良・牧ノ原IC→新野→東平尾→板沢→方ノ橋（雨天対策として袋井）→JR掛川駅（15：00頃）→静岡駅（16：30頃）	掛川層群基底部のタービダイト（堀之内層），中部の五百済凝灰岩部層，上部の陸棚斜面相（土方層）と下部陸棚相（宇刈層）．浮遊性有孔虫の進化過程，沖合泥質相における堆積過程と大型底生動物の応答．沿岸相における貝化石密集層（大日層）（雨天時予備）	9/22	20名	延原尊美＊ 茨木雅子	6,000円（昼食付き）	（1/2.5万） 相良・下平川・掛川・山梨	雨天時によるコース変更あり．参加者少数の場合はマイカー方式あるいはレンタカー使用に切替．
D	相良油田	静岡鉄道バス相良営業所集合（10：00）→相良油田の里→相良町民族資料館→相良町海老江石油湧出地→相良営業所（15：00頃）	相良油田の歴史的資料館および石油湧出地の見学	9/22	20名	和田秀樹＊ 北里　洋 平野　聡	4,000円（昼食付き，タクシー代含む）	（1/2.5万） 相良	静岡－相良営業所バス（片道1,250円）は自己負担．移動はタクシー乗り合わせ．マイカーでの集合地で合流 OK
E	赤石山地南部の四万十帯	JR静岡駅集合（9：00）→宇津ノ谷→千葉山→川口→家山→中川根町尾呂久保ウッドハウス「おろくぼ」（泊）→大札山→蕎麦粒山→池ノ谷→静岡駅（15：00頃）	瀬戸川帯の海洋プレート層序，深海性泥質岩，枕状溶岩，蛇紋岩，三倉帯の逆転した整然層，メランジュ，犬居帯のメランジュ，寸又川帯の整然層の堆積構造，褶曲，デュープレックス	9/22－23	20名	狩野謙一＊ 村松　武	18,000円 （2日目の昼食付き）	（1/2.5万） 静岡西部，島田，八高山，家山，千頭，蕎麦粒山	一カ所で渡渉あり，標高1,400mまで登る．天候によっては寒い．マイクロバス使用

班番号	班・名称	見学コース	主要見学対象	期日	定員	案内者 （＊：リーダー）	費用概算	地形図	備考
F	大谷崩と山伏	JR静岡駅集合（9：00）→梅が島→西日陰沢→大谷崩→梅が島（泊）→山伏→大谷崩近く→静岡（15：00頃）	大谷崩，大谷崩の堆積物，堰止湖跡，瀬戸川帯のスレートのクリープ（バックリング，ベンディング，キンキング），多重山稜，線状凹地	9/22－23	20名	千木良雅弘＊ 目代邦康	18,000円（2日目の昼食付き）	（1/2.5万） 梅ヶ島	標高差200m程度で約3時間の登山あり．天候によっては寒い．マイクロバス使用
G	南部フォッサマグナにおける衝突地塊	JR静岡駅→JR甲府駅集合（11：00）→御勅使川→大柳川→早川→身延覚林房（泊）→身延山→古関→和平→甲府駅（16：00頃）	櫛形山地塊を構成するペペライト・タービダイト・デブライト，糸魚川静岡構造線，身延山頂からの南部フォッサマグナ展望，御坂地塊中の水中単成火山，水中火砕流堆積物	9/22－23	20名	天野一男＊ Andrew Martin 依田直樹	22,000円 （2日目の昼食付き）	（1/2.5万） 小笠原，鮎沢，新倉，切石，精進，身延	２日とも渡渉あり．（交通）静岡駅から甲府駅：東海道線－身延線特急ふじかわ１号8：45静岡駅発，解散後の交通：中央本線16：32甲府発（新宿行），小型バス使用．
H	富士川河口断層帯とその周辺	JR静岡駅集合（9：00）→由比→大城→富士川橋→蓬莱橋→羽鮒→下柚野→別所→第２東名工事現場→岩本山→静岡駅（17：00頃）	浜石岳累層，蒲原礫層，岩淵安山岩類，新富士火山の溶岩類（大淵溶岩，芝川溶岩，北山溶岩，富士宮溶岩），芝川断層のトレンチ調査跡，古富士泥流堆積物	9/22	20名	山崎晴雄＊ 水野清秀 下川浩一 林　愛明	6,000円（昼食付き）	（1/2.5万） 蒲原，富士宮，吉原，入山瀬	マイクロバス使用
I	富士山 ※欄外にに注意事項あり	JR静岡駅集合（8：00）→東名高速→富士IC→富士宮有料道路→青木ヶ原→スバルライン（五合目剣丸尾～吉田大沢～御庭奥庭）→鳴沢村吉野荘（泊）→富士北麓公園→篭坂峠→須走り口登山道旧馬返グランドキャニオン→御殿場口登山道新五合目→JR三島駅（15：30頃）	富士宮大沢，西暦864年青木ヶ原丸尾溶岩類，西暦937年以降の剣丸尾溶岩類とテフラ，吉田大沢，吉田大沢岩なだれ堆積物，南東側古富士テフラ模式地・新富士テフラ模式地（含む火砕サージ・岩屑流・土石流など）．	9/22－23	30名	上杉　陽＊ 千葉達朗 海野　進 染野　誠 吉本充宏	20,000円（昼食別）	（1/5万） 富士宮，山中湖，富士山，御殿場	標高が高く寒いので防寒着が必要，交通渋滞により解散が遅れる場合あり． バス使用
J	JAMSTECおよび三浦層群三崎層・初声層	JR静岡駅→新横浜駅→横浜駅→京浜急行追浜駅集合（10：30）7→JAMSTEC→浜諸磯（見学・宿泊）→海外町→城ヶ島灯台→城ヶ島安房崎付近→京浜急行三崎口駅（14：00頃）	JAMSTECの諸施設見学，三浦層群三崎層の堆積構造，褶曲，断層，注入構造，vein structure，デュープレックス，海底地すべりなど，初声層の堆積構造など	9/22－23	20名	小川勇二郎＊ 徐　垣 山本由弦 仁平麻奈美	10,000円（昼食含まず）	（1/2.5万） 横須賀，浦賀，三浦三崎	現地での移動は路線バス，タクシーおよび徒歩

見学旅行の申込〆切は８月８日（金）です． たくさんのご参加をお待ちしています．

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

海上保安庁測量船による海底地形調査体験乗船参加者募集のお知らせ

海上保安庁海洋情報部は航海の安全に必要不可欠な海図・電子海図の刊行のほか東海地震など大きな被害が予想される巨大地震予知のための調査，我が国の大陸棚を広げるための調査，東京湾再生プロジェクトの推進など海洋における様々な問題に取り組んでいます．

今回，海洋情報部の業務をより一層理解していただくための講座を開設いたします．

講座は二日間で，初日は海上保安庁海洋情報部庁舎において「我が国の大陸棚について」，「海の名称について」「海底の地形」などの海洋に関する講義の他「海図作成現場」，「海洋情報資料館」などの見学を，また二日目は海上保安庁測量船「昭洋」に乗船して東京湾内外において実際に最新の海洋調査機器による海底地形調査などを体験していただく予定です．

この機会に海洋に関する最新技術と海に関する調査がどのように行われているのか体験してみませんか．

日時・場所：１日目　平成15年７月28日（月）
午前９時30分～午後５時
海上保安庁海洋情報部
（東京都中央区築地５－３－１）
２日目　平成15年７月29日（火）
午前９時30分～午後６時
海上保安庁測量船「昭洋」
（京浜港お台場）

主　　催：国土交通省海上保安庁海洋情報部

募集対象：海洋科学・地理学に興味のある中学・高校教師の方々．

募集人見：30名
希望される方は住所，氏名，所属学校名，担当科目，連絡先をハガキ，FAX，またはメールでお申し込み下さい．

申込先：〒104－0045　東京都中央区築地５－３－１海上保安庁海洋情報部
担当者　海洋情報部企画課　西
電話　03－3541－3878
（内線526）
FAX　03－3541－4535

締め切り：**７月11日（金）必着**

その他：定員となり次第締め切らせていただきます．
：参加費は無料ですが旅費等につきましては参加者の個人負担となります．
：参加者へは集合場所案内図，講座時間割など別途お知らせします．
：海上保安庁海洋情報部ホームページでも募集しています．

http://www1.kaiho.mlit.go.jp

「第６回テチス浅海域に関する国際シンポジウム」のご案内

表記シンポジウムは，2002年８月の開催が主催者側の都合で延期になっておりましたが，このたび下記の日程で開催されることになりました．

日　程：2003年８月25～29日
開催地：ハンガリー，ブダペスト市，ハンガリー科学アカデミー
主催者：Dr. Miklos Kazmer（Eotvos大学古生物学教室）
巡　検：シンポジウム期間中とシンポジウム後に，３つの巡検が予定されています．
・Pre-Symposium Excursion C: ８月22～24日，中生代テチス南・北縁の堆積相
・Mid-Symposium Excursion B: ８月28日，ブダペスト市周辺の海成第三系
参加登録料：一般250ユーロ，同伴者100ユーロ

会議の詳細に関しましては，ウェブサイトにアクセスするか，直接主催者までご連絡ください．また，このシンポジウムの日本からの世話人である小笠原，上野までお問い合わせいただいても結構です．

http://pangea.elte.hu/paleo/tethys/circ2.htm
Dr. Miklos Kazmer
Department of Palaeontology, Eotvos University
H-1518 Budapest, P.O. Box 210 HUNGARY
Fax: +36-1-381-2104
E-mail: kazmer@ludens.elte.hu
（筑波大学　小笠原憲四郎）
（福岡大学　上野勝美）

第47回粘土科学討論会

１）主催：日本粘土学会
２）共催：日本地質学会ほか
３）期間：平成15年９月24日（水）～26日（金）
４）会場：広島大学大学院理学研究科　講義棟（東広島キャンパス）
〒739－8526　東広島市境山１－３－１，TEL 0824－24－7466（北川）
５）講演：
A．特別諦演
題目：「韓国の粘土鉱床」　（仮題）
B．平成15年粘土科学討論会シンポジウム
■粘土圏の空間分布
■粘土鉱物のナノ解析手法
■総合討論
６）見学会：
日時：平成15年９月26日（金）
場所：呉市中国工業技術研究所（瀬戸内海大型水理模型・施設の見学），
東広島市　西条粘土採掘場および西条酒蔵見学　参加費：5000円／人
申込：講演申込みの際に申し込まれるか，官製はがきに参加者氏名・所属を記入して，下記申込先にお送りください．
７）会費：参加登録料　会員（共催学会員を含む）2000円，学生会員1000円，非会員3000円
講演要旨集代　3000円
懇親会費；一般5000円，学生3000円
８）連絡先：
〒739－8526　東広島市鏡山１－３－１
広島大学大学院理学研究科・地球惑星システム学専攻
北川隆司
TEL：0824－24－7466
FAX：0824－24－7466
電子メール：
kitagawa@sci.Hiroshima-u.ac.jp
jige@hiroshima-u.ac.jp

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は締切日半月前までに，執行委員会までお申し込み下さい．

平成15年度　第11回日産科学賞

1．日産科学賞
1）表彰の趣旨：
若手・中堅の研究者かの中から，特に優れた業績を上げておられ，さらに今後発展の可能性が大であるかたを表彰する事を通して，学術文化の向上発展に貢献することを目的としている．
2）推薦基準：
自然科学分野（人文・社会科学分野との複合領域を含む）で，以下に示す理由で学術文化の向上に大きな貢献をした我が国の公的研究機関に所属する新進気鋭の研究者とします．
a）学術研究上重要な発見をした
b）新しい研究分野を開拓した
注）原則として，個人表彰とする
3）推薦依頼数：1名
4）賞の内容 ：
正賞・・・賞状，メダル
副賞・・・賞金500万円
5）推薦締切：**平成15年8月29日(金)必着**

上記推薦を希望の方は，あらかじめ，学会執行委員会宛に8月12日(月)までにご応募ください．

2．学術研究助成．
学術研究助成は財団直接応募です．
応募の締切：**平成15年7月31日(木)必着**
詳細は，http://www.t3.rim.or.jp/~at02-nsj/josei.htmlまで

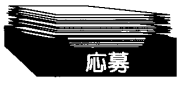
資料請求・問い合わせ先：（申請書は下記ＨＰよりダウンロードできます）
財団法人　日産科学振興財団
〒104－0061　東京都中央区銀座6－16－9
TEL（03）3543－5597
FAX（03）3543－5598
E-mail at02-nsj@t3.rim.or.jp
http://www.t3.rim.or.jp/~at02-nsj/

平成16年度海洋地球研究船「みらい」個別研究課題の募集について

海洋科学技術センターは，平成16年度海洋地球研究船「みらい」による共同利用型研究の実施にあたり，長期観測研究計画に基づいた主要研究課題に沿う，個別研究課題および乗船研究者を募集致します．
今回の公募は，平成16年度「みらい」運航計画（資料2）に基づいた7つの研究航海が対象となります．奮ってご応募戴きますようお願い申し上げます．
募集〆切　**平成15年7月4日(金)**
応募書類は郵送の場合：平成15年7月4日(金)の消印有効，
電子メールによる応募の場合：7月4日(金)17：00必着）
募集方法　公募要領詳細については，インターネット上において案内いたします．尚，応募は専用の研究課題申込書でのみ受付けます．
ホームページアドレス：http://www.jamstec.go.jp
応募課題の選定　8月中旬に開催される「みらい」運用検討委員会において，長期観測研究計画および主要研究課題との関係を考慮して審査を行い，選定いたします．乗船研究応募者への通知は9月中旬を予定しています．
研究成果の発表　「みらい」を利用した研究成果は，すみやかに「みらいシンポジウム」（年1回開催）で発表していただく義務があります．
申込み及び問合せ先　ご不明な点については，下記までお問い合わせ下さい．
海洋科学技術センター研究業務部計画調整課（武藤・佐々木）
〒237－0061　神奈川県横須賀市夏島町2－15
電話：（046）867－9883
FAX：（046）869－0812
E-mail：mirakobo@jamstec.go.jp

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．



東京大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻　教官公募

1．公募人員
地球生命圏科学講座　助教授1名
2．募集分野
フィールドワーク，試料の分析，室内実験などから得られた一次データを基に，地球生命圏の化学的環境がいかにして形成され変動してきたかを研究する分野．
3．応募資格
博士の学位を有し，大学院博士前期・後期課程での教育・研究指導ができる方．
着任後は地学科の講義や実習も担当して頂く予定．
4．着任時期
決定後できるだけ早い時期
5．募集方法
自薦または他薦（他薦の場合は本人が了解していること）
6．提出書類
1）履歴書（学歴および職歴）
2）これまでの研究概要（1600字程度）
3）研究業績目録（査読論文とそれ以外の総説，著書などに分類）
4）主要な原著論文別刷り（コピー可）3編以内
5）今後の研究・教育の計画および抱負（1600字程度）
6）応募者に関する所見を伺える方2名の氏名および連絡先
7）他薦の場合は，上記1）から4）

7．応募締切
平成15年7月10日(月)（消印有効）
8．書類送付先
〒113－0033　東京都文京区本郷7－3－1
東京大学大学院理学系研究科　地球惑星科学専攻
専攻長　浦辺　徹郎
封筒の表に「地球生命圏科学講座教官応募」と朱筆して（簡易）書留にて郵送のこと．

北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球惑星物理科学講座　教授公募

1．職種・人員：地球惑星科学専攻地球惑星物理科学講座　教授・1名
2．専門分野：**固体地球惑星物理学**に関連する研究分野
3．着任予定時期：2004年4月1日
4．応募書類：
(1) 履歴書
（国内外の学会活動，受賞歴，参加しているプロジェクト研究歴，各種研究費受領歴，学位審査履歴（主査・副査のほか実質的指導を含む），非常勤講師の経歴などを含む）
(2) これまでの研究経過（2,000字程度）
(3) 研究業績目録（和文のものは和文で表記すること）
A．査読のある論文および総説
B．査読のない論文および総説
C．著書
D．解説，報告などその他の出版物で特に参考になるもの
(4) 主な論文別刷または著書　5篇（複写可）

(5) 今後の教育・研究の計画と抱負（2,000字程度）

5．応募締切：**2003年7月31日（木）（必着）**

封筒の表に「教官公募（地球惑星物理科学講座教授）関係」と朱書きし，書留にて郵送すること

6．書類の送付及び問い合わせ先：

〒060－0810　札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院理学研究科
地球惑星科学専攻　林　祥介
電話：011－706－3564
ファックス：011－746－2715
電子メール：shosuke@ep.sci.hokudai.ac.jp
ホームページ：http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/

北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球惑星物質圏科学講座　教授公募

1．職種・人員・専攻分野
地球惑星物質圏科学講座　教授　1名
専攻分野：**火山学，岩石学分野**

2．応募資格：博士号を取得していること

3．着任予定時期：2004年4月1日

4．応募書類

イ）履歴書（内外の学会活動，受賞歴，参加しているプロジェクト研究歴，各種研究費受領歴なども記載すること）

ロ）これまでの研究経過（2,000字程度）

ハ）研究業績目録（和文のものは和文で表記すること）

A．査読のある原著論文
B．査読のない論文，総説など
C．著書
D．解説，報告などその他の出版物で特に参考になるもの

ニ）主な原著論文の別刷または著書　10篇以内（複写可）

ホ）今後の教育・研究の計画・抱負（2,000字程度）

ヘ）応募者について照会が可能な方2名の氏名と連絡先

5．応募締切：**2003年8月15日（金）必着**

封筒の表に「教官公募関係」と朱書し，簡易書留にて郵送すること。

また，公募書類中の第1ページに応募先講座名と専攻分野を明記すること。

6．書類の送付先及び問い合わせ先：

〒060－0810　札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学　大学院理学研究科　地球惑星科学専攻　鈴木徳行
電話：011－706－2730
ファックス：011－746－0394
電子メール：suzu@ep.sci.hokudai.ac.jp

九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門太陽惑星系物質科学講座　助教授公募

1．職種・人員　太陽惑星系物質科学講座所属助教授1名

2．専門分野　**地球惑星物質科学**（鉱物物性を実験的に研究し，かつ教育に熱意のある方を希望）

3．着任時期　決定後なるべく早い時期，平成16年4月以前の着任を希望

4．提出書類

(1) 履歴書
(2) これまでの研究歴（A4用紙2枚以内）
(3) 研究業績リスト
原著論文（査読の有無，投稿中のものを含めてよい），総説，報告書，著書に区分
(4) 主要論文別刷もしくは投稿中論文のコピー，3篇以内（研究業績リストに○印を付す）
(5) 着任した場合の研究・教育に関する抱負（A4用紙2枚以内）
(6) 応募者を熟知し意見を聞ける方の氏名と連絡先並びに応募者との関係

5．公募締切　**平成15年9月5日（金）必着**

6．書類送付先および問合せ先

〒812－8581　福岡市東区箱崎6－10－1
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門
太陽惑星系物質科学講座所属助教授候補者選考委員会
委員長　加藤　工
Tel：092－642－2653，2652
Fax：092－642－2684
E-mail: tkato@geo.kyushu-u.ac.jp

7．その他

(1) 提出書類の内，別刷以外はすべてA4用紙を使用すること
(2) 封筒に「応募書類在中」と朱書し，簡易書留で郵送のこと

九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門固体地球惑星科学講座　教授公募

1．職種・人員
固体地球惑星科学講座担当教授　1名

2．専門分野
岩石循環科学（地球内部の物質循環・進化を研究し，かつ教育に熱意のある方を希望）。

3．着任希望時期　平成16年4月

4．提出書類

(1) 履歴書
(2) これまでの研究概要（A4用紙2枚以内）
(3) 研究業績リスト｛原著論文（査読の有無），総説，報告書，著書に区分｝
(4) 主要論文の別刷3編（研究業績リストに○印を付す）
(5) 研究・教育に対する抱負（A4用紙2枚以内）
(6) 応募者を熟知し，意見を聞ける方2名の氏名とその連絡先並びに応募者との関係

5．公募締切　**平成15年9月5日（金）（必着）**

6．書類送付先および問い合わせ先

〒812－8581　福岡市東区箱崎6－10－1
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門
固体地球惑星科学講座担当教授候補者選考委員会
委員長　佐野　弘好
Tel：092－642－2606
Fax：092－642－2686
E-mail：sano@geo.kyushu-u.ac.jp

7．その他

①提出書類のうち，(4) 以外は全てA4用紙を使用すること。
②封筒に「応募書類在中」と朱書し，簡易書留で郵送のこと。

核燃料サイクル開発機構平成16年度任期付研究員（博士研究員）公募

1．募集人員　6名程度

2．研究分野　高速増殖炉開発及びそれに関連する核燃料サイクル技術開発，高レベル放射性廃棄物処分基盤研究分野等で核燃料サイクル開発機構の業務として実施可能な研究

3．応募資格　採用時に原則として35歳以下の方で博士号取得者（採用時に取得見込みを含む）であり，かつ健康な方であって，研究を自主的，主体的に遂行する意志のある方

4．契約開始日　2004年4月1日（予定）

5．待遇等

謝金：月額50万円程度（社会保険料及び税込み）
研究諸雑費：150万円程度/年
通勤手当，住居手当は，職員に準じて別途支給

なお，必要に応じて外部の研究機関においても，1年間に2ヶ月を限度として研究を行うことができます．

6．研究期間

年度毎に所要の評価を行い，1年度毎に契約を更新することとし，最大限3年間まで延長することができます．ただし，平成17年度には核燃料サイクル開発機構は日本原子力研究所と統合する予定であり，平成17年度以降の研究については，変更になる場合があります．

7．応募締切　**2003年9月25日（木）【必着】**

8．問い合せ先　核燃料サイクル開発機構
技術展開部　技術協力課
亀田，佐藤，小山
電話　029－282－1122
（内線41111，41127，41126）
FAX　029－282－7980
E-mail　daigaku@jnc.go.jp
サイクル機構ホームページ
（http：//www.jnc.go.jp/）

報　告

本会委員会以外の研究会・委員会等よりのお知らせを掲載します.

日本学術会議第18期第７回 地質学研究連絡委員会議事録

１．日時：平成15年３月５日(水)13：30～16：30
２．場所：日本学術会議６F会議室
３．出席者：青木，岩松，斎藤，永広，木村，公文，小玉，田切，玉生，西脇，前田，吉岡
　欠席者：在田，小川，中尾
４．報告・議事概要
１）青木委員からこの間に開催された日本学術会議総会，連合部会・第4部部会の報告がなされた.
連合部会（２月12日開催）
●新しい学術体系委員会の報告について
①新しい学術体系―社会のための学術と文理の融合―新しい学術体系委員会（第一次案）報告
②価値選択の合理的根拠分科会報告（第3次ドラフト)―価値選択の合理的根拠分科会
③「俯瞰型研究プロジェクトについて」報告書（案)―俯瞰型研究プロジェクト研究理論分科会
④人間と社会のための新しい学術体系(案)―科学論のパラダイム転換分科会
について委員会委員長･各分科会委員長から内容について説明が行われた.
●生命科学の全体像と生命倫理―生命科学・生命工学の適正な発展のために―生命倫理特別委員会の表記報告書（案）について委員長から内容についての説明がなされた.
●日本学術会議の在り方について（報告）
昨年11月11日の総合科学技術会議本会議において，「日本学術会議の在り方について(中間まとめ)」が決定された．その後，パブリック･コメントが行われ，12月19日には第12回専門調査会が開催され，設置形態等について議論が行われた．今後１～２回専門調査会を開催し，設置形態等について，国の機関と法人化のメリット･デメリットを詳細に検討していく予定であり，「最終まとめ」の時期は未定である.
しかし，「最終まとめ」が昨年末までに決定されなかったことから，日本学術会議としては，第19期（平成15年７月22日～）の会員選出手続きは，現行制度の下で行わざるを得ない.
その後，２月26日の総合科学技術会議本会議において，「日本学術会議の在り方について」がとりまとめられ，内閣総理大臣に対する意見具申が行われた.（本誌別掲）
第４部会（２月12日開催）
●小委員会の新規招集申請
物理学研連から「放射光科学(Synchrotron Radiation Science)」小委員会を申請し承認された.
●対外報告（案）について
①地球化学･宇宙化学研連報告（案）
「環境学における地球化学のあり方について　アンケートの集計結果」
②核科学総合研連，原子力工学研連，エネルギー資源工学研連･核工学専門委報告（案）
の２対外報告（案）が一部修正の上，承認された.
●平成15年度代表派遣旅費配分額の決定及び派遣実施計画案の作成について
地質科学関係からは次の６氏の派遣が採択された：在田一則（地質研連），日下部実（地化・宇化研連），奥村晃史（第四紀研連），松原聡（鉱物研連），上野宏共（鉱床専門委），小笠原憲四郎（古生物研連）

２）今後の地質学研連の活動について
研連の見直しの決定が第19期の冒頭に行われる．学術会議の改革が控えているので，地球科学関係の研連の定員配分は慎重に行う必要がある．７部制がなくなることや，研連がなくなることなどがあり，19期中に実体を作る必要がある．研連に代わるものも必要である.
研連再編に伴う各研連の定員の配分は，環境理学や理学振興の新規研連での定員確保も考慮して，次期会員に申し送りたい.
地質研連での定員1の減については，地質学会からの定員6を5に減じ，減じた１は新規研連において地質学会からの定員として確保するよう申し送る.

３）その他・報告
●堆積学小委員会から第17回国際堆積学学会について報告があった.
●第３回水フォーラムについて，地質研連が共催することを了承した.
●IODPについて，設立総会が行われることの報告があった.
●地質年代小委員会から「わが国における年代学分野の活動状況報告書」が作成されたことが報告された.

次回開催　５月21日

（田切美智雄）

日本学術会議第18期第７回 地質科学総合研連会議報告

日時　平成15年３月11日(火)　13：30～16：40　於　日本学術会議第６部会議室
出席者　岩松　暉，青木謙一郎，斉藤常正，野田浩司，町田　洋，田中　剛，公文富士夫，石井武政
　欠席　千木良雅弘
＜報　告＞
１．学術会議報告
報告は省略．学術会議の改革問題について報告をうけ，質疑と議論を行った．改革案についてはco-optationという会員選出方法，連携会員の役割，国際対応の課題などについて疑問が出された．19期会員が学術会議法に則って選出されることになった．研連や科研費審査委員候補者の役割と選び方に疑問と意見がだされた.
２．第３回世界水フォーラムの地下水セッションへの協賛
昨年富山でのプレフォーラムも盛況．本番は３月19日に大阪国際会議場
３．2002　International Geo-environmental and Medical Geology Conferenceの協賛.
盛会であったとのこと．環境学の一分野として重要との指摘があった.
４．第13回Goldschmidt国際会議（倉敷）の準備状況が報告された.
2ndサーキュラー完成．2003年９月７～12日　くらしき作陽大学
５．地質科学関連学協会連合で５月末に予定していた地学教育シンポジウムは，地球惑星科学関連学会合同大会でほぼ同じようなシンポジウムが開催されるので，秋に延期する．会場とタイミングを見計らう必要がある.

＜審　議＞
１．地学教育の振興について
災害列島とも呼ばれる日本列島にすむ日本人の地学についての常識が薄れつつあることや，高校での地学の履修率の低下や共通試験での受験者減などを契機として，日本社会に地学を定着させていく方策や問題提起を議論した．これらの課題は時期への申し送り事項に加えることとした.
２．地質科学総合研連の役割と構成について
次期には第四紀専門委員会と地質環境専門委員会（仮称）とで構成する．地質環境専門委員会は，応用地質学や環境問題へ対応することとし，その構成については岩松会員を中心に関連する諸学協会と協議して提案することとした.
３．環境地質学の学問体系と教育体系について
地球環境系にシフトした地質系の学科が増えた中で，それに対応した教育と学問の体系の必要性について議論した.
４．今後の検討課題
JABEEおよびハイレベル放射性廃棄物処分問題など．これについては次回に検討し，必要な申し送りを行うこととした.

次回は６月11日開催.

地学教育および地学普及の方策について

2003/3/11地質科学総合研連での話題から

＜地学を普及する活動＞

1．市民向け講演会：年会開催時に多くの学会で行っている．ほぼ定着．宣伝の問題

2．展示・体験会・・・産総研地質調査センターの移動展示会

3．博物館等の野外見学会

4．大学の公開講座，深田研の公開講座

場所，テーマ，時期をみはからって，多様な取り組みが必要．熟年層を中心に需要は大きい．災害で死なないための「常識」．

＜義務教育課程での問題＞

・理科における地学の比重の低下．地学には謎があり，初等教育には最適．

・野外観察，野外調査など，体験活動の低下・不足．

・義務教育の低学年では自然と触れあう地学が重要．河原の石など最高の教材．

・地学を教えられる教師の不在，教材の不足・・・教師への教育の機会を．各県の教育委員会との協力，地学担当者の育成．大学教員の自覚

・教科書，指導要領の整合性，合理性．教育の体系化

＜高校教育課程＞

・受験科目としての地学の復活．理学部のある大学では，個別学力試験で地学が受験できる．この体制は維持する必要があるし，拡大も必要．

・センター試験に独自の「地学」の時間帯を．

・数は少ないが，地学教員を定期的に採用している県もある．

・すべての高校生に地学を履修をさせたい．Vs　大学受験にシフトした教育体制がネック．

＜大学教育＞

・文系の学生，私立大学を中心に地学の講義は多い．その機会を生かすべき．マスプロで大変だが．災害科学という視点での教育は重要．

・理系の学生に対する地学教育の課題．環境科学の一翼としての役割

・大学教員の自覚．純粋科学だけでなくて応用・環境分野にも関心を．

・GIS教育の導入などによって現在的課題への対応も必要

＜学会の課題＞

・会員に対する関心の喚起．シンポジウムの開催

・新しい教科書の作成

・地学を広める戦略の策定（vs化学学会の活動を見習う必要）

・地学関連学会との協力は？．日本地学教育学会の役割と問題もある

・情報の流通の要としての役割，インターネットの利用

日本学術会議鉱物学研究連絡委員会（第18期，第８回）および鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会（第18期，第８回）合同会議　議事録

日時　平成15年２月28日(金)13：30～17：00

場所　日本学術会議　第４部会会議室（６階）

出席　青木謙一郎（学術会議会員），山中高光（鉱物学研連委員長）赤荻正樹（研連幹事），井上厚行，大谷栄治，金田博彰，高橋正樹，豊　遙秋，松原　聰，吉田武義，梶原良道（鉱床学専門委員会委員長）石渡　明（専門委幹事），上野宏共，浦辺徹郎，千葉　仁，根建心具，丸山孝彦

欠席　有馬　眞，松井正典（研連幹事），溝田忠人

議事

報告

(1) 学術会議の報告（青木）

平成15年２月12～13日（水～木）に日本学術会議において，連合部会，第４部会，常置委員会と特別委員会が開催された．鉱物学研連に直接関係する議題について報告する．

（ア）連合部会

省略．本誌８P参照．

（イ）第４部会

1．諸報告

日本学術会議，諸委員会の活動状況について各委員から報告がなされた．

2．小委員会の新規招集申請

物理学研連から「放射光科学(Synchrotron Radiation Science)」小委員会が申請され承認された．

3．対外報告（案）について

下記の２つの対外報告（案）が一部修正の上，承認された．

① 地球化学・宇宙化学研連報告(案)「環境学における地球化学のあり方について　アンケートの集計結果」

② 核科学総合研連，原子力工学研連，エネルギー資源工学研連・核工学専門委員会報告（案）「大学法人における放射性同位元素・放射線発生装置・核燃料物質などの管理について」

4．平成15年度代表派遣旅費配分額の決定及び派遣実施計画案の作成について

地質科学関係からは次の６氏の派遣が採択された：在田一則（地質研連），日下部実（地化・宇化研連），奥村晃史（第四紀研連），松原　聰（鉱物研連），上野宏共（鉱床専門委），小笠原憲四郎（古生物研連）．

5．平成15年度夏部会について

長野県野辺山天文台と信州大学において行うことが決まった．

次回の連合部会・第４部会は６月に開催する．

学術会議の抜本的改革が先送りされたため，先般議論した研連の定員削減案（各研連の定員を削減し，６つの新しい研連をつくる案）が復活した形である．当面はこの案に従って運営していくことになろう．

(2) IMA報告（山中，松原，大谷）

昨年のエディンバラで行われたIMA総会で，神戸での開催が正式承認され，日本で36年ぶりにIMAが開催されることになった．鉱物研連の第17期では誘致委員会を発足させ，今期（第18期）では準備委員会を設立し，更に組織委員会に改組した．組織委員会の事務局長は大谷栄治氏，地区委員会（LOC）委員長は松井正典氏，財務委員長は村上　隆氏，巡検委員長は松原　聰氏，プログラム委員長は藤野清志氏が就任した．松原巡検委員長から３月中に初案をつくること，中国・韓国は巡検に加えないことが報告された．大谷事務局長からは，秋の各学会の集まりでIMA神戸大会の宣伝を盛り上げたいとの考えが述べられた．

IMAの各committeeとworking groupの代表を次の通り決定した．Applied Mineralogy 溝田忠人，Classification of Minerals 宮脇律郎，Crystal Growth 塚本勝男，History and Teaching 渡辺　隆，New Mineral Name 松原　聰，Museums 豊　遙秋，Ore Mineralogy 清水正明，Physics of Minerals 大谷栄治，Gem Minerals 宮田雄史，Environmental Mineralogy 村上　隆，Abstract 砂川一郎，Cosmic Mineralogy 留岡和重，Inclusion in Minerals 円城寺　守，Mineral Equilibria 赤荻正樹，Organic Minerals 田崎和江

(3) その他報告（山中）

（ア）科研費の見直し　キーワードの追加について

科研費の分科「地球惑星科学」の細目「岩石・鉱物・鉱床」は従来通り鉱物研連だけが窓口研連となることが決まった．席上配布資料に基づき，この細目の従来の８つのキーワードに（i）「鉱物物理」，（ii）「生体・環境鉱物」・（iii）「深成岩および変成岩」の3つを加えて11個とし，従来の「マグマ」を「マグマおよび火山岩」に変更することが了承された．追加の理由は（i）地球物理現象を鉱物物性的な観点から研究，（ii）鉱物学的な見地から環境問

題を研究，(iii) 岩石学の「深成岩および変成岩」が欠落，のためであり，変更は (iii) の追加に伴う措置である．地球化学・宇宙化学研連でもキーワードの多くに「化学」の文字を加える等の変更を行った．

（イ）平成16年度科研費審査委員の選出について

今後の科研費審査委員選出方法および研連構成の各学会から推薦された１段・２段審査委員候補者の研連での推薦順位付けについて確認した．16年度は２段審査委員候補者２名と１段審査委員候補者６名を研連から推薦する．合わせてそれぞれの補欠候補者を次回研連で決定する．各学会に依頼する１段・２段審査委員推薦人の人数について山中委員長の案が説明された．

審議

(1) 科研費審査委員の推薦方式について

各学会から推薦される１段審査委員の候補者数は，２年分を合計すると常に次の通りになるようにする．岩鉱５，鉱物５，資源５，地質１，粘土１，地化１．これはこの研連に各学会から選出されている委員数（学術会議会員１名を除く）と一致する．各学会の実際の推薦数をこの原則に則り２年周期で充足する方法が承認された．

(2) 今後の鉱物学研連と鉱床学専門委との関係について

この２つは従来通り別組織とし，当面は統合しない．しかし，鉱床学専門委員会の委員も，辞令は鉱物学研究連絡委員会委員として発令されており，連絡の便宜上や意見交換の必要上からも，実際の会議は今後も合同で行うことで合意した．

(3) 組織改革で生じる新研連の委員について

６つの新研連（理学振興，科学と社会，ゲノム科学，学術情報発信，環境理学，惑星科学（席上資料配布））のうち，「惑星科学」には土山明氏に出ていただく．それ以外の研連から委員を出すよう要請された場合は，選出母体の学会にとらわれず柔軟に対処することが了承された．

日本学術会議第18期第７回 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録

日時：2003年２月27日（木）13：30〜15：30
場所：日本学術会議第４部会会議室（６階）
出席者：田中剛委員長，青木謙一郎，日下部実，清水　洋，下山　晃，田結庄良昭，留岡和重，中澤高清，松田准一各委員

報告事項

１．学術会議関係

１．１．連合部会（2003年2月12日開催．青木委員）

省略．本誌８P参照．

１．2．第４部会（2003年２月12日開催．青木委員）

(1) 日本学術会議・諸委員会の活動状況の報告があった．

(2) 小委員会の新規招集申請：物理学研連から「放射光科学（Synchrotron Radiation Science)」小委員会を申請し承認された．

(3) 対外報告（案）について：次の２件の対外報告（案）が一部修正の上，承認された．

①地球化学・宇宙化学研連報告「環境学における地球化学のあり方についてーアンケート結果の集計結果」(案)，②核科学総合研連，原子力工学研連，エネルギー資源工学研連・核工学専門委報告「大学法人における放射性同位元素・放射線発生装置・核燃料物質などの管理について」(案)．

(4) 平成15年度代表派遣旅費配分額の決定及び派遣実施計画案の作成について：地質科学関連研連からは，6件が採択された．

(5) 平成15年度夏部会について：長野県野辺山天文台と信州大学において行う．

１．３．科学研究費補助金　分科地球惑星科学細目地球宇宙化学のキーワードの提案について：学術会議事務局学術課へ次の修正意見を提出した（田中委員長）．

現行：元素分布，同位体，物質循環，地殻・マントル化学,隕石化学,大気圏・水圏・生物圏化学

改正案：元素分布，同位体，スペシエーション，物質循環，放射年代，地殻・マントル化学，地球外物質化学，火山化学，水・岩石相互作用，大気圏・水圏化学，生物圏地球化学，有機地球化学，環境地球化学，海洋化学

２．その他

２．１．国際隕石学会の招致：極地研・南極隕石研究委員会から相談のあった「国際隕石学会の日本招致」について，研連委員長の「基本的には賛成であり，研連からもできる限りの支援をしたい」との報告を，本研連として了承した．

２．２．第13回ゴールドシュミット国際会議（2003年９月）の準備状況の報告．（田中委員長）

審議事項

１．分科地球惑星科学細目地球宇宙化学の平成16年度科学研究費審査員候補者推薦依頼について：関係学協会への候補者の推薦依頼文を審議し，了承した．基本的には従来通りである．

２．環境学における地球化学についてのアンケート取りまとめ：提言を明確にすることなどの修正意見を参考にして，研連の対外報告としての最終まとめを田中委員長に一任した．

その他

１．次回の委員会開催予定（2003年５月15日）

２．本研究連絡委員会以降，総合科学技術会議において「日本学術会議の在り方について」の最終まとめが2月26日付で出されたとの連絡があった．その概要は以下のとおりである（本誌別掲）．

日本学術会議第18期第８回 古生物学研究連絡委員会議事録

日時：2003年３月６日（木）13：30〜17：00
場所：日本学術会議　601室
出席：斎藤常正会員，野田浩司，小泉　格，長谷川善和，八尾　昭，小笠原憲四郎，辻　誠一郎，西田治文，大路樹生，北里　洋　各委員
欠席：瀬戸口烈司，加瀬友喜　委員
学術課：中野事務官

議　題

１．前回の議事録の承認

第７回議事録が示され，承認された．

２．学術会議報告（斎藤）

１）本来２月に開かれるはずの総会が６月に延期された事を受けて，２月12日には連合部会および第４部部会が開催された．「日本学術会議の在り方」について現状報告があり，議論が行われた．

２）２月26日に総合科学技術会議による「日本学術会議の在り方について」の意見書が出された．昨年11月に中間まとめとして了承された後，パブリックコメントを受けた結果，最終報告としてまとめられたものである．意見書は，中間まとめと異なり，学術会議側が提案したものに近い内容になっており，科学者コミュニティーの代表として学術会議を国の機関として位置付け，政府に対する情報提供・提言，科学に関する連絡・調整機能，社会とのコミュニケーション機能を役割としている．また，研究助成機能は外される方向が明示されている．この意見書を受け，国会に学術会議設立に関する法案が提案されることになる．なお，具体的な改革は第19期学術会議において議論される．

３）第４部部会で，平成15年度代表派遣について審議した．本研連が推薦した小笠原憲四郎氏のShallow Tethys会議への派遣が決定した．

４）第19期総会で研究連絡委員会が再編されることが決定する．古生物研究連絡委員会は１名減少し，11名となる．

３．第19期古生物研究連絡委員会の組織に付いて（野田）

第19期研連に申し送る新研連組織案を検討した．減少する１名は，新しく立ち上がる研連に確保するように努力することとした．

４．学芸員科研費申請資格に関して（野田他）

博物館学芸員が科学研究費申請資格を受けられるように支援するための，具体的方策を議論した．自然史学会連合が行っている，博物館館員によるネットワーク活動と連携する．

5．タイプ標本のデータベース化について（小笠原）

1）第2巻を刊行し，現在，第3巻を編集中である．日本学術振興会科学研究費補助金成果公開促進費に応募した．

2）タイプ標本データベースを産総研Web を通じて公開する事とした．その掲載管理については，日本古生物学会と産総研が覚書を結び，責任を持って履行する．

6．その他

古生物学が社会とどのような関わりを持ち，影響を与えることができるのか，という問題に関し，北里試案（改訂版）が示され，議論された．対外報告として印刷公表する方向でまとめる．

日本学術会議第18期第8回海洋科学研究連絡委員会議事録

日時：平成15年3月11日(火)13：30〜16：00
場所：日本学術会議　第4部会議室
出席者：西田篤弘，谷口旭，石井春雄，伊藤絹子，井内美郎，平啓介，角皆静男，友定彰，花輪公雄，伏見克彦，前田明夫，灘岡和夫，松山優治，山口征矢，佐藤義夫，蒲生俊敬，滝沢隆俊（オブザーバー）
欠席者：斎藤常正，西田篤弘，杉本隆成，寺崎誠，古谷研，西田周平，松田治

委員会開催に先立ち，今年1月に急逝された野崎義行委員への哀悼の意が表された．続いて，諸事情により辞任された松永勝彦委員に替わって委員に就任された佐藤義夫氏（東海大）と，野崎義行委員の後任として就任された蒲生俊敬氏（北海道大）の紹介があった．

Ⅰ．第7回議事録について

事前にメールで回覧し，必要な修正を施してあった第7回海洋科学研究連絡委員会（平成14年11月26日開催）の議事録案を承認した．

Ⅱ．報告事項

(1) 日本学術会議関連（谷口委員長）

2月12日に開催された連合部会で報告された，日本学術会議の将来をめぐる情勢について，説明があった．その後2月26日付で総合科学技術会議は，日本学術会議のあり方専門調査会の答申に基づいて「日本学術会議の在り方について」をとりまとめ，公表したが，その概要が配布され，全文が回覧された．その際，総合科学技術会議がホームページで募集した「専門調査会における検討―中間まとめ」に対するパブリックコメントの取りまとめも回覧された．

公表された「日本学術会議の在り方について」には，当面第19期会員選出を従来どおり進め，学術会議の設置形態については今後10年以内に検討体制を設けて成案を得るべきであることが明記された．会員数を200－300人程度とし，外に連携会員を設ける一方，研連が廃止することが提案されているので，実際に1400に達する学協会との連帯をどう確保するか，国際学術団体対応のNational Committee機能をどう果たすかなど，具体的な検討が始まるだろうが，それがどこでどのように進むのか，判然としていない．このとりまとめに盛り込まれている，その他のさまざまな改革案の実現シナリオも，全く判然としていない．

(2) IOC分科会（ユネスコ国内委員会自然科学小委員会）（平委員）

① 平成15年2月28日開催のIOC分科会で主査の交替が決議され，平啓介氏から寺崎誠氏へ交替することになった．

② 平成15年9月，オーストラリア，パースで開催されたWESTPAC第5回総会の報告，GOOS関連の動向，JCOMMの動向，IODE（国際海洋データ交換）のポリシーについて報告があった．

Ⅲ．協議事項

(1) 海洋科学研連委員の交替について（谷口委員長）

野崎義行委員の後任として蒲生俊敬氏の就任を承認した．

(2) 科学研究費補助金のキーワード等の見直しについて（谷口委員長）

2月28日の科研費分科会で各研連から出された意見や要望について検討された．本研連が関係する細目「環境動態解析」では，すでに対応研連が12あってキーワード数（10語）よりも多かったところへ，新たに5つ以上の研連から参加希望が出たため終始がつかなくなり，今回は一切の改善を見送ることになった模様である．複合領域のため関連する分野も多く，混乱を招きやすいので，良い改正案を分科会に期待するという意見，窓口研連を中心にして良いルール作りから始めるべきであるという意見，キーワード重視を基本方針とすることで良いルールが可能になるであろうという意見などがあった．

(3) 科学研究費補助金の審査員候補者の推薦作業について（谷口委員長）

平成16年度の科研費審査員候補者の推薦は昨年と動揺に行われることが学術振興会から表明された．それを受けて学術会議の作業が始まるが，そのタイムスケジュールは例年同様極めて窮屈なので，各学会では予め準備をすすめて欲しい旨，委員長から要望があった．また，各学会から科研費審査員候補者を推薦するときに候補者の略歴と主要業績票を添付し，本研連で候補者選考の参考に供することを承認した．その書式見本を谷口委員長より各学会事務局へ送ることとした．

この他，平成15年度から分野領域の大枠化，分科細目の見直し，キーワードの整備などが行われたものの，科研費にまつわる根源的な問題の多くは未だ解決されていないこと，また，トップダウン的な研究費配分が強調される陰で基礎研究が軽視されそうな危うさがますます懸念されること等々の意見があり，今後の動向について学術会議が果たすべき役割は大きいとの認識で一致した．

(4) 平成16年度日本海洋学会春季大会シンポジウムについて（滝沢委員）

海洋科学技術センターの海洋地球研究船「みらい」が運航開始して5年経過したところで，これまでの研究成果を総述して評価を受け，今後5年間に関する提言を得ることを目的としたシンポジウムを企画したので，本研連委員長からも意見を貰いたい旨，滝沢委員から紹介があった．これを受けて，ボトムアップの計画が難しいという「みらい」の運用体制の改善が必要であること，将来を担う大学院学生の乗船が徐々に難しくなっている現状の抜本的な改善が必要であること，船舶のような大型施設を建造する一方でそれを効率的に運用するための運営費を削減するという我国の予算編成のあり方が有効な税金の使い方と矛盾することなど，本研連が深い関心をよせている諸問題について活発な意見交換を行った．それを受けて，「みらい」の将来に関する提言とともに，対外報告「海洋科学の教育と研究のための船舶不足と水産系大学練習船の活用について」を配布するなどして，海洋研究教育における船舶の重要性について本研連が考えてきたことも幅広く紹介することを了承した．

(5) 初等中等教育における海洋教育の問題点について（角皆委員）

角皆委員より，社団法人海洋調査協会の依頼により執筆した原稿「わが国の初等中等教育における海洋教育の現状に思う」を配布したうえで，問題点の指摘と改善に関する提言があった．それを題材にして，日本における海洋教育問題には明治期の実学偏重精神の残留が災いしていること，内陸域と縁海域とでは子供の海への親しみに差があるとする常識への疑念，ゆとり教育の枠を利用して，海洋学会が中心になって積極的に初中等教育へ貢献していくことが有益であることなど，活発な意見が出た．

（議事録作成・伊藤絹子）

学会HP（http://www.geosociety.jp）に掲載しています．ご覧下さい．

地球化学・宇宙化学研究連絡委員会報告

「環境学における地球化学のあり方について―地球化学分野へのアンケート集計結果―」

IGCPニュース2003

1．IGCP国内委員会（国際学術協力事業研連IGCP専門委・小委）

平成14年度は第18期第６回を平成14年６月18日，第７回を平成14年９月10日及び第８回を平成15年２月28日にと，計３回の委員会を日本学術会議で開催した．審議・決定・実施された主な事項について以下に報告する．

1）日本国内委員会の活動報告書として"Japan Contribution to the IGCP, 2002 Report"（A4 版，６頁）及び「日本IGCP活動報告2002」（A4版，42頁）を２月に刊行して内外の関係方面に配付した．

2）国際学術協力事業研連に，①国際性を高めるための方策，②国際学術協力事業推進のための事業費確保のための方策，等についてIGCP国内委の考え方を提案した．

3）齋藤文紀委員（産総研）が提出した"Deltas in the Monsoon Asia-Pacific Region（Delta MAP）: Late Quaternary Development and Recent Changes Due to Natural and Human Influences"及び多田隆治氏（東大）が提出した"Monsoon Evolution and Tectonics-climate Linkage in Asia : Monsoon Evolution and Tectonics-climate Linkage in East Asia and its Marginal Seas During the Late Cenozoic"の２つのプロジェクトを，国内委員会としてIGCP理事会に推薦した．

4）第31回IGCP理事会が開催され，①"Geoscience in the Service of Society"に一層努力し，特に水問題や自然災害問題への更なる寄与が重要であること，②米国がユネスコに復帰するが予算にははねかえらないこと，③Geological HeritageとしてGeoparkを設定しGeotourismと結んで地球科学の普及に努める動きがヨーロッパを中心に活発化していること，④IGCPの名称変更（International Geoscience Program）が本年10月のIUGSの会議で決定される予定であること，などが議論されたことを受けて日本が今後IGCPの活動をどのように取り組むべきかついて意見を交換した．

5）新しい委員として，小山内康人氏（岡山大）とM. Santosh氏（高知大）が加わり，吉田　勝委員はプロジェクトNo.453の代表として引続き委員を務めることとなった．

2．IGCP本部

第31回IGCP理事会は平成15年２月３～７日にパリのユネスコ本部で開催され，各プロジェクトの活動の評価，各国内委員会報告の検討，新しいIGCPプロジェクトの採択等が行なわれた．日本国内委が推薦した上記２プロジェクトは採択された．日本からは島田允堯理事（九州大学）のほか波田幹事が参加した．なお，島田理事は今回で４年間の任期を終了した．

3．IGCP国内委員会

委員長　土　隆一
幹　事　波田重熙（411，ユネスコ国内委）
委　員
後藤　仁敏（406）　脇田　浩二（411）
佐々　恭二（425）　平野　弘道（434）
海津　正倫（437）　小山内康人（440）
M. Santosh（450）　吉田　　勝（453）
斎藤　文紀（464）　村尾　　智（産総研）
本吉　洋一（極地研）

4．現在日本がLeadershipをとっているプロジェクト

No.411
Geodynamics of Godwanaland-derived Terranes in E and S Asia（1998-2003）
Co-Leader：波田重熙

No.434
Land-Ocean Interactions during Cretaceous（1999-2003）
Leader：平野弘道

5．日本にWorking Groupが組織されているプロジェクト

No.411: 上掲
Representative：脇田浩二

No.434: 上掲

No.437:
Coastal Environmental Change during Sea-level Highstands（1999-2003）
Representative：海津正倫

No.440:
Rodinia Assembly and Breakup（1999-2003）
Representative：小山内康人

No.450:
Proterozoic Sediment-hosted Base Metal Deposits of Western Gondwana（2000-2004）
Representative：M. Santosh

No.453:
Uniformitarianism Revisited: Comparison Between Modern and Ancient Orogens（2000-2004）
Representative：吉田　勝

No.464:
Continental Shelves during the Last Glacial Cycle: Knowledge and Application（2001-2005）
Representative：斎藤文紀

6．2002年（平成14年）度の日本の活動

No.368：「東ゴンドワナにおける原生代地質事件」

IGCP-368の国内ワーキンググループの活動は昨年で終了し，現在は成果の取りまとめが一部のメンバーによって進められているが，多くのメンバーはIGCP-440に参加した．

No.406：「北極圏を取り巻く地域の古生代脊椎動物」

平成14年12月から15年２月に神奈川県立生命の星・地球博物館で特別展「ザ・シャーク～サメの進化と適応」が開催され，サメに関するシンポジウム及び講演会を開催した．後継プロジェクト"Middle Palaeozoic Vertebrate Biogeography, Palaeogeography and Climate"が採択された．リーダーはDr. Zhu Min（China）とDr. Gavin Young（Australia）である．

No.411　「東・南アジアにおけるゴンドワナランド起源テレーンのジオダイナミクス」

一昨年6月IGCP368/411/440の共催で開催したSymposium on the Assembly and Breakup of Rodinia and Gondwana, and Growth of Asia" の成果を掲載するGondwana Research Special Issueの編集が進行中である．IGCP 411の第４回国際シンポジウムが昨年11月タイ・ピサヌロックで開催され，10ヶ国から約150名（うち日本から14名）が参加して開催された．ProceedingsをJour. Asian Earth Sciencesの特別号として刊行する．なお，本プロジェクトは本年度で終了したが，活動の１年延長を申請し認められた．

No.425　「文化遺産と地すべり災害予測」

ユネスコ／京都大学国際共同シンポジウム“Landslide Risk Mitigation and Protection of Cultural and Natural Heritage”を本年１月21日～25日に京都で開催し，21ヶ国から87名が参加した．同会議ではかねてからの計画である「国際地すべりコンソーシアム（ILC）」を設立した．

No.434　「白亜紀の炭素循環及び生物多様性の変動」

昨年９月に第４回の国際シンポジウムをハバロフスク市で，また，アムール川流域で巡検を開催し，６ヶ国54名が参加した（うち日本から22名）．ProceedingsをThe Island Arcの特別号（編集者：坂井卓とG.L. Kirillova）として出版する．本年１月に開催された日本古生物学会シンポジウム「白亜紀海洋無酸素事変」を共催した．第５回国際シンポジウム及び巡検は本年12月にタイで開催する．

No.437　「高海水準期における海岸環境の変化」

昨年10月26日～11月２日に，西インド諸島バルバドスにおいてINQUA海岸線委員会及びIGU海岸システム委員会との共催で第4回ミーティングか開催された．全体を通じてのテーマは"Quaternary Sea-level Changes"で，珊瑚礁に関する研究発表と巡検が実施された．

No.440　「ロディニアの集合と分裂」

Chris Powell（旧プロジェクト・リーダー）シンポジウムが昨年７月オーストラリア地質学会の際に開催された．７月にナミビアで開催されたワークショップには国内から２名，また，８月にニュー

ジーランドで開催されたGondwana-11には１名が参加した．９月５日～７日に事故で他界した渡辺委員の追悼シンポジウムとしてIGCP368/411/420/440の共催で"PPO-Asia（Amalgamation of Precambrian Blocks and the Role of the Paleozoic Orogens in Asia）"を開催し，８ヶ国約50名が参加した．ProceedingsをGondwana Researchの特集号として出版予定である．本年３月にはスリランカでワークショップを開催し，国内から４名が参加した．

No.450　「西ゴンドワナの堆積性非金属鉱床」

本年３～４月に，南インド南部地域の層状及び脈状グラファイトと南インド中部のKarur-Kangayam宝石地帯の月長石と関連鉱化作用について，現地調査を実施した．

No.453　「新旧変動帯の比較研究」

日本ワーキンググループとしては，日本の中生代～新生代花崗岩活動とパンアフリカ変動帯の花崗岩活動の比較研究や変成帯における年代論的研究を進める予定である．

７．新しいプロジェクト

平成15年２月３～７日まで，パリのユネスコ本部で開かれたIGCP 理事会において，提案された26件中，以下の14が本年から新しく発足するプロジェクトとして採択された．テーマ略称（期間），連絡先は以下の通り：

IGCP-469:
Variscan Terrestrial Biotas and Palaeoenvironments（2003-2007）
Dr. C. J. Cleal, Dept. Biodiv. Syst. Biol., Natl. Mus. & Gal. Wales, Cathays Park, Cardiff CF10 3NP, Great Britain.
e-mail: chris.cleal@nmgw.ac.uk

IGCP-474:
Depth lmages of the Earth's Crust（2003-2007）
Dr. B. J. Drummond, GPO Box 378, Canberra City ACT 2601, Ausrtalia.
e-mail: barry.drummond@ga.gov.au

IGCP-475:
Deltas in the Monsoon Asia-Pacific Region（Delta MAP）（2003-2007）
斉藤文紀，〒305－8567　つくば市東１－１－１，中央第７，産業技術総合研究所沿岸環境保全研究グループ
e-mail: yoshiki.saito@aist.go.jp

IGCP-476:
Monsoon Evolution and Tectonics-climate Linkage in Asia（2003-2007）
多田隆治，東大大学院地球惑星科学専攻，〒113－0033　文京区本郷７－３－１　東京大学理学部５号館
e-mail: ryuji@eps.s.u-tokyo.ac.jp

IGCP-478:
Neoproterozoic - Early Palaeozoic Events in South - West Gondwana（2003-2007）
Dr. C. Gaucher, Depto. Pal., INGEPA, Fac. Cien., Igua 4225, 11400 Montevideo, Uruguay.
e-mail: gaucher@chasque.apc.org

IGCP-479:
Sustainable Use of Platinum Group Elements （2003-2007）
J. E. Mungall, Dept. Geol., Univ. Toronto, 22 Russel Str., Toronto, ON M5S 3B1
e-mail:mungall@galena.gedogy.utoronto.ca

IGCP-481:
Dating Caspian Sea Level Change（2003-2007）
Prof. S. B. Kroonenberg, Dept. Appl. Earth Sci., Delft Univ. Tech., P. O. Box 5028, 2600 GA Delft, the Netherlands.
e-mail: skroon@mail.ru

IGCP-482 / 489:
Geodynamics of the East African Rift System / Geophysical Characteristics and Evolution of the Southwestern Branch of the East African Rift System（2003-2007）
Assoc. Prof. G. Mulugeta, Univ. Uppsala, Dept. Earth Sci., Villavagen 1675236 Uppsala, Sweden.
e-mail: Genere.Mulugeta@geo.uu.se

IGCP-485:
The Boundaries of the West African Craton （2003-2007）
N. Ennih, Univ. Chouaib Doukkali, Fac. Sci., Dept. Geol., B. P. 20, 24000 El Jadida, Maroc. e-mail: ennih@ucd.ac.ma

IGCP-486:
Au-Ag-telluride-selenide deposits（2003-2007）
Dr. H. N. J. Cook, Geol. Surv. Norway, N-7491, Trondheim, Norway.
e-mail: Nigel.Cook@ngu.no

IGCP-490:
Environmental Catastrophes（2003-2007）
Prof. S. Leroy, Geog. & Earth Sci., Brunel Univ., Uxbridge UB8 3PH, Middlesex, U. K.
e-mail: suzanne.leroy@brunel.ac.uk

IGCP-491:
Middle Palaeozoic Vertebrate Biogeography, Palaeogeography and Climate（2003-2007）
Dr. ZHU Min, Inst. Vertebrate Palaeont. Palaeoanthrop., Chinese Acad. Sci., P. O. Box 643, Beijing 100044, China.
e-mail: zhumin@ivpp.ac.cn

IGCP 493:
The Rise and Fall of the Vendian Biota（2003-2007）
Prof. P. Vickers - Rich, School of Geosci., Monash Univ., Melbourne, Victoria, Australia.
e-mail: pat.rich@sci.monash.edu.au

IGCP-494:
Dysoxic to Oxic Change in Ocean Sedimantation During the Middle Cretaceous: A Study of the Tethyan Realm（2003-2005）
Dr.X.Hu, Dep.Earth Sci.,Chengdu Univ. Tech., No.1 Dongsan Rd., Er'xianqiao, Chengdu, 610059, Sichuan, P.R.China.
e-mail: hxm@cdut.edu.cn

以上の結果，現行のプロジェクトは，O.E.T.（期間延長）の５を含めて計42となる．新しいプロジェクトに参加しておられる方，および，参加を希望される方はご連絡下さい．

また，新しいプロジェクトを提案したいと思っている方はご連絡下さい．提案様式は日本IGCP活動報告2002（本年２月刊）に掲載されています．今年の提出期限は10月初旬で，推薦のための国内委員会は９月に開かれる予定です．

８．御質問等は，下記にお寄せ下さい．

委員長　土　隆一
〒422－8035　静岡市宮竹１－９－24
土研究事務所
電話：054-238-3240　FAX：054-238-3241
e-mail: rtsuchi@mvi.biglobe.ne.jp

幹　事　波田重熙
〒657－8501　神戸市灘区鶴甲１－２－１
神戸大学大学教育研究センター
電話：078-803-7601　FAX：078-803-7640
e-mail: hada@kobe-u.ac.jp

（文責　土　隆一・波田重熙）

日本学術会議の改革の具体化案についての危惧

5月23日に開催された地質学研連で学術会議の改革の経過と，改革の骨子が学術会議会員から説明されました．その改革の骨子にあたるメモを以下に掲載します.その内容と会員からの説明を聞くと，日本における科学者を代表する機関として位置づけられてきた日本学術会議が，科学者のみならず，国民とも一層かけ離れた機関となる危惧を持ちました．

もっとも大きな問題は，会員および連携会員がすべて「上」から組織されることであり，また，いったん決められた会員自らが次を選ぶというシステムとなることで，自浄作用や自己改革の機能がほとんど期待できないことです．これでは，とても日本の科学者70万人の声を代表することはできません．

また，そのような会員構成の下で実際に予想される機能が，総合科学技術会議が行う政策提言という機能，および学士院会がもつ顕彰機能にということになり，事実上の存在価値が問われる事態になりかねないことです．これでは二段階（三段階かもしれませんが）を経ての解体への道を歩むことになりかねません．

以下の骨子を読んで，ご意見をお聞かせください．微力ながら，研連運営等に反映させていきたいと存じます．

（第18期学術会議地質学研連委員　**公文富士夫**）

日本学術会議の改革の具体化について（案）

（日本学術会議改革推進委員会審議経過概要）

Ⅰ　果たすべき機能

①政策提言・助言機能，②科学者交流・連携機能，③国際交流・協力機能，④社会対話・説明機能

Ⅱ　部の構成

・人文社会系，生命系，理工系の３部制

各部の定員は会則・規則事項（選出（改選）後の総会ごとに各会員が所属を確定して規定（改正）

Ⅲ　会員の数

・現行の210名を基本

Ⅳ　会員の任期

・６年の任期制（３年ごとに半数改選）で再任回数は制限しないが，70歳で定年退職

・定年退職，辞職，死亡による欠員を補充するための会員（任期は前任者の残任期間）を毎年任命（「連携会員」の中から部長が推薦）

・活動実績評価を実施し，不適任者は再任しない．

Ⅴ　初回の会員選出

・独立的な「日本学術会議会員選考委員会」を時限設置し，30名程度の委員を委嘱（委員は日本学術会議会長，総合科学技術会議議長（又はその指名する議員），日本学士院院長が人選）

・登録学術研究団体（要件等は見直す）等から推薦を受けるほか，委員会も自ら選定して，候補者名簿を作成

・委員会は，設定した領域ごとに委嘱した専門委員による第一次審査の結果を参考に210名を選考して，名簿を日本学術会議会長に提出し，その上申を受けて内閣総理大臣が任命

※第19期会員の任期が1年前後短縮される可能性あり

Ⅵ　２回目以降の会員選出

・３年ごとに，会員が「連携会員」の協力を得て，「推薦委員会」を設置し，登録学術団体等から推薦を受けるほか，委員会も自ら候補者を選定して，co-optationにより選出し，内閣総理大臣が任命

Ⅶ　「連携会員」

・法律上は名称・位置付けと任命権者（会長）のみ規定（任期は会員と同様）

・現行の研究連絡委員会委員の予算定数を基本

・初回は会員が「推薦委員会」を設置して選考し，２回目以降は会員（上記Ⅵ）と同様の手続きにより、会長が任命

・外国人研究者を「連携会員」として委嘱できる

Ⅷ　役員等

・会長，副会長のほか，各部で部長，副部長（各部１名）及び幹事（各部２名程度）を選任（任期は３年）

・副会長は国際担当を設けて３名とすることが必要

Ⅸ　委員会等

・運営審議会を「執行委員会」（構成員は会長，副会長，部長）に改組・改称

・研究連絡委員会を廃止して「課題別委員会」を置く

Ⅹ　総合科学技術会議との「車の両輪」体制の構築

・総合科学技術会議に対し，「科学者コミュニティの代表機関」として，責任ある助言を行う

・総合科学技術会議との相互補完的・緊密な「車の両輪」体制を確立するため，内閣総理大臣の所轄とすることが必要

科学技術総合会議調査委員会の最終答申

「日本学術会議の在り方について」［概要］

平成15年２月26日

Ⅰ．科学者コミュニティの果たすべき役割

・科学者の英知を結集→科学技術の進展を方向づけ，人類社会の課題への対処について助言

⇒　期待される役割を果たし得る新しい日本学術会議を構築

Ⅱ．日本学術会議に求められる機能

①政策提言機能

・長期的･分野横断的･国際的な観点から，政府に対し科学的・中立的提言

②科学に関する連絡･調整機能

・我が国科学者の意見の集約と各国科学者との連携･交流

③社会とのコミュニケーション機能

・科学技術活動に関する情報発信と社会の意見の吸収・反映

総合科学技術会議：直接に科学技術政策を形成

日本学術会議：科学者の意見を幅広く集約して政策提言

⇒　役割分担して我が国の科学技術の推進に寄与

Ⅲ．当面の改革案

①会員選出：学協会が推薦⇒科学的業績等に基づき，会員が選出

②部門：７部制⇒２～３部門に大別化（新分野･融合分野に対応）

③運営体制：「総会主義」⇒理事会で機動的な意思決定

④連携体制：「連携会員」（仮称）の導入等で体制強化

⇒　科学的水準の向上と機動的運営により，政府や社会に尊重される権威ある提言を可能に

Ⅳ．設置形態の在り方

中立性・独立性・運営の柔軟性の確保，欧米主要国の通例

総合的に考慮

我が国社会の状況等（提言等の社会的受け止め，寄附税制等）

①国家的な設置根拠と財政基盤の保証を受けた独立の法人とすることが理想像

②当面「国の特別の機関」を維持しつつ改革推進

→10年以内に検討体制を設けて評価

⇒　改革の進捗状況と社会状況を見極め，より適切な設置形態の在り方を検討

Ⅴ．改革の推進

①当面の改革（Ⅲ）を早急に実施

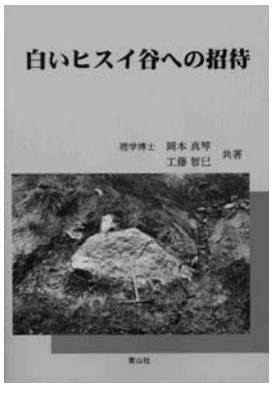
②日本学術会議も体制を整え改革を推進

→科学技術活動の評価などの面で総合科学技術会議と連携し，科学技術政策に寄与

紹　介

白いヒスイ谷への招待

岡本真琴，工藤智己　著



〈青山社，2003年発行，B6版，171頁，
ISBN4-88359-099-2，定価1,905円（税別）〉

本書は題名どおり，日本で初めて発見・確認された「白いヒスイ」を見つけるまでのすさまじい執念の物語と，これらヒスイの科学的な意義づけを行ったものである．このように，本書は白いヒスイ発見にまつわるアマチュア（工藤智己）の探査行と，そのヒスイを分析，科学する専門家（岡本真琴）のコンビで内容が構成されている．著者らは「地学研究会」「北但層群化石研究会」などでの活動を通して長年大屋町の白ヒスイについて検討してきて，それらをまとめ結実したのが本書である．このように，「白いヒスイ」への飽くなき科学的挑戦は，この鉱物が今なお，謎の多い鉱物であることにも起因する．なお，本書の魅力の一つに，筆者の１人工藤智己がその模索と実際の体験で得たものが，詳細に述べられており，優しい語り口で記され，大変読みやすくなっている．アウトドアの一つに選んだ「地学」を懸命に取り組んで得た地質観察の体験を通して書かれており，その意味で本書は，ふるさとを愛し，フィールドから学ぼうとする者の生き方が伝わる貴重な書である．白いヒスイ谷への招待と題した本であるが，学校現場での教材や鉱物収集マニアにも利用できるように，最新の多数の図や写真が多用されているだけでなく，丁寧な用語解説も多く記されている．また，読むだけでなく，実際に本書を利用して岩石や鉱物の探査を行う方法，鉱物名や岩石名の決定過程など情報を集めるハンドブックとしても利用できる．このように，本書はこれまでの読みづらい鉱物，岩石の本と異なり，ヒスイ探査の過程とその同定，さらにその保存運動などの成果を取り入れており，大変理解されやすく述べられており，学生や鉱物採集に興味ある者や地学教師には参考になることが多いのではないかと思う．

本書はⅣ章からなり，その構成は下記のようである．

第Ⅰ章　ヒスイ探査行
第Ⅱ章　ヒスイの科学
第Ⅲ章　ヒスイ産地の保存
第Ⅳ章　ヒスイ探査の追憶・あれこれ
（付）用語解説
写真・資料掲載目次
参考文献

第Ⅰ章は，４節にわけられており，プロローグでは，著者の１人工藤智己が当時高校の先生であった恩師小西知巳先生（故人）と出会い，但馬の大地の地学的な調査を始めること，師の背中を追って山野を歩きながら「但馬の大地探検」に取り組みだしたことが述べられている．また，２節では兵庫県北部・但馬の地質，さらに，ヒスイ産地付近の地質が述べられ，ヒスイを懐胎した母床である蛇紋岩が解説されている．３節の岩石と鉱物の定義をやさしく解説，ヒスイという名の由来などにつづき，４節では，ヒスイ探査のきっかけが昭和40年に，鳥取県若桜でヒスイの大塊が発見され，小西先生と工藤が大屋でもヒスイ探査を始め，探査の準備が始まったことが記されている．本邦産ヒスイ発見の歴史をみると，新潟県糸魚川や青海町でのヒスイの発見，そして若桜のヒスイがあり，そして，ついに昭和46年６月，大屋町ヒジロ谷でヒスイの転石群が小西・工藤により発見され，町指定天然記念物となり，新聞でも大きく報道された．その６年後の昭和52年３月に，同じく大屋町ヒジロ谷の奥で，新設林道でヒスイの大塊が発見され（小西・工藤），これが本邦初の「ヒスイの自然産状を示す露頭，兵庫県指定天然記念物」の発見となったのである．このヒスイは不純物がほとんど含まれない白いヒスイ輝石岩で，別名「白玉」と呼ばれる．ヒスイは「関宮蛇紋岩体」の南縁に位置し，ヒジロ谷と呼ばれる沢に産する．そして，その沢で数10キロから数トンに及ぶヒスイ岩塊が見つかったのである．

第Ⅱ章では，７節に分けられており，１節では，ヒスイの理想化学式が示され，その性質が記載されている．２節では，ヒスイが低温（約300ｏC），地下約100kmの高圧条件でできることが述べられ，３節でヒスイ輝石と固溶体が述べられている．４節では，大屋産ヒスイ輝石岩のX線回折パターンと偏光顕微鏡写真が詳細に記載されている．また，共生鉱物が曹長岩，角閃石類のほか，金雲母，コランダムなどからなることが記されている．５節では，ヒスイは非常に結晶質で，白く濁るのは方沸石などを含むためであること，組成はオンファス輝石に近い成分で純度が高いこと，また，比重はやや小さいことが述べられている．また，曹長岩は赤いジルコンを含んでいる．これら内容を2000年の国際鉱物学博物館学会や日本鉱物学会で発表され，世界にも広く紹介された．

第Ⅲ章では，４節からなり，１節では，ヒスイ輝石岩転石群の保存までに，昭和42年８月から平成６年４月までの困難な保存運動の経緯と，学術資料の保護管理の難しさが述べられている．２節では，ヒスイ輝石岩の自然露頭の保存までの経緯が述べられている．保存にあたっては，盗掘との戦いで，残念であるが，頑強な鉄格子に改良された保護施設建設の経緯が記されている．３節では，先進地，糸魚川市の小滝渓谷，次に青海町を訪ね，その保護施設などを見学し，その成果をもとに４節では大屋産ヒスイの標本展示が図られたことが記されている．

第Ⅳ章では，８節からなり，１節では著者の工藤知巳と恩師小西先生が２年半あまりヒスイ探査のため，蛇紋岩地域を歩き回った話などが紹介され，２節ではヒスイ，すなわちグリーンの石をイメージして探査を行い，数百点の石をくまなく検討を行ったことが述べられている．そして，ようやくヒスイ探査の目安になる曹長岩の大転石を見つけたのである．そして，１年後の昭和４５年再び曹長岩をハンマーでたたき，強く跳ね返ってくる強靱さが記されている．この強靱な白い試料を鳥取大学でX線回折をしてもらった結果，ヒスイの可能性が高いことが報告され，ここに，ヒジロ谷で予想外の白いヒスイ輝石岩の転石群を見つけたのである．

以上，本書の内容を章ごとに順次述べてきたが，本書の特徴として，「白いヒスイ」発見に至る物語が，生々しく述べられており，さらに，それが日本列島の生い立ちにもつながることが，簡潔に記載され，これまで鉱物や岩石にあまり興味をもたれなかった方も，一読されれば，ヒスイの持つ意義がよく理解され，地学を専門にされてこなかった方にも大変有益になると思われる．特に，ヒスイだけでなく意識的に岩石や鉱物の野外での産状写真や顕微鏡写真が用いられており大変利用しやすい．特に，日本で初めての「ヒスイ輝石岩」の自然産状を示す露頭写真は圧巻である．現地には評者も学生を連れよく巡検を行ったが，今も立派な「白いヒスイ輝石岩」保存されている，近くには日本最南限のミズバショウ自生地や明延鉱山，夏梅鉱山があり，巡検地としても向いており，案内書としての意味も有する．地学を学び始めた者には大変有益である．一読をすすめたい．

（田結庄良昭）

地中海は沙漠だった
―グロマー・チャレンジャー号の航海―
（The Mediterranean Was a Desert ― A Voyage of the GLOMAR CHALLENGER ―）

ケネス・J・シュー　著
岡田博有　訳

古今書院　2003年3月10日発行，A5判，175ページ，定価3200円＋消費税160円
原著出版社：Princeton University Press
ISBN4-7722-5077-8　C1044

よい本が翻訳書として出版された．原著者は中国出身のKenneth Jinghwa Hsü教授（スイス連邦工科大学名誉教授）である．同教授は1948年に南京大学を卒業後，米国・ヨーロッパで研究活動を続け，堆積学・テクトニクス・海洋地質学を中心に独創的な，精緻な，エネルギッシュな研究を通じてグローバルに数々の顕著な業績をあげてきた．とくに，60年代末に掘削船グロマー・チャレンジャー号が建造されて深海掘削計画（DSDP）が緒について以来，その主な深海掘削に直接的に関わり，深海掘削計画の中心的役割を果たし，過去30年以上にわたり地質学やプレートテクトニクスの発展をリードしてきた功績はまことに大きい．

シュー教授はDSDPが軌道にのってきたさなか，1970年の地中海の第13次掘削航海に主席科学者の一人として指名された．この航海では，地中海の海盆の成因と構造を明らかにすることを目的として15地点が掘削されたが，その間「地中海は干上がった」ことを，掘削コアの堆積学的観察・考察から発想し，乗船の共同研究者とのはげしい討論，適切な地点の設定・掘削を通じて，中新世の蒸発岩層が深海底に存在することを見出し，最終的に検証した．

本書は，この航海の計画時の様子にはじまって，全航海の経過を，掘削の遂行とその成果を中心に日記風に描写，とりまとめたものである．それぞれ比較的短い20数章から構成されているほか，最後に簡単な用語・略語解説がつけられて非専門家の理解を助けている．図・写真も適宜挿入されていて全体的に読みやすい．初版は航海が終わって間もない1972年に出版された．その後，1975年に地中海について第42A次掘削航海が行なわれ，同教授はふたたび主席科学者の一人をつとめ，第13次航海の結論をさらに検証し，地中海の劇的な環境変動の状況を明らかにした．その概要を「あとがき」として加えた1983年出版のものが本訳書の原書である．

シュー教授の著書は，すでに訳書として出版されている「地球科学に革命を起こした船―グロマー・チャレンジャー号」（高柳洋吉訳，1999年，東海大学出版会刊）でもそうであるが，著者自身の思考過程，研究の進め方，感慨等を詳しく記述しているほか，共同研究者や関係者とのやりとり，彼らのさまざまな面の描写を記述し，研究の全体的な背景や位置づけがあわせて何時の間にか頭のなかに入ってくるというスタイルである．

本書も同様である．さらに，「地中海は沙漠だった」という一つの限られたテーマではあるが，記述を通じて，科学的な発想・予見と進め方，とくに野外科学の進め方の一端を，また，閉ざされた空間でのさまざまな専門分野の個性的な研究者との共同研究，しかも船長をはじめとする掘削船関係者との共同作業におけるリーダーシップを感じ取らせてくれる．掘削そのものの進行状況，予期しないさまざまな技術的トラブルの発生，コアの船上処理，議論の状況など，詳細な日記風の描写のために迫真的・臨場的であり，飽きさせない．

紹介者はちょうど四半世紀前に堆積研究者としてグロマー・チャレンジャー号の航海参加の機会を得たことがあるが，随所でそのときのことをあらためてなつかしく思い起こすことができた．現在では深海掘削航海に参加された若い研究者の方も非常に数多くなっているが，体験された方々には地中海の構造発達史や古地理・古環境変遷史という観点以外でも，興味深く読んでいただくことができるだろう．

とくに，建造中の日本で初めての深海掘削研究船「ちきゅう」による統合国際深海掘削計画（IODP）,OD21のスタートを目前に，細部についてはもちろん大きく異なる点が多いが，研究に参加される方々にグロマー・チャレンジャー号の掘削と研究を本書を通じて学んでおいていただくことは意味のあることであろう．また，先に触れたが陸域の地質研究にも全く共通的な野外科学の進め方に対して非常に示唆的なことが多いという点で，広く本書をお奨めしたい．あわせて，この機会に，この本の内容のあらましを含みさらに広範に深海掘削の歴史を記述しているシュー教授の別著（前掲）を読まれることもお奨めしたい．

（水野篤行）

お知らせ

“IUGS｛国際地質科学連合｝の変成岩命名法委員会（SCMR）の”**“変成岩の統一的命名法：４．超低変成度ー低変成度岩”**のほぼ最終版が<http://www.bgs.ac.uk/scmr/home.html>に発表され関心のある方の意見を求めております．

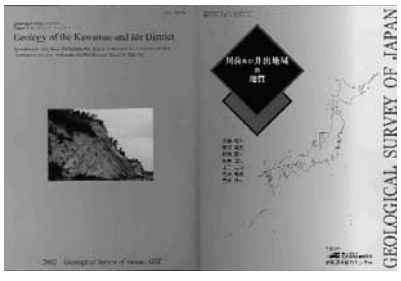
編者は　P. Arkai, F.P.Rossi & J. Desmonsです．今までの版と比べて格段と良くなっていると思います．なお高圧変成岩、角閃岩・グラニュライト、ミグマタイトなどの中間案もなどの命名法の提案も同ホームページから読むことが出来ます．

（坂野昇平　橋本光男）

新版地質図・報告書類

川前及び井出地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）

久保和也・柳沢幸夫・利光誠一・坂野靖行・兼子尚知・吉岡敏和・高木哲一



（産業技術総合研究所地質調査総合センター，2002年5月発行，A4版，136p，定価6,000円（税別））

東西約60km，南北約200kmにわたる阿武隈山地は，南北に伸びた紡錘形の深成岩・変成岩地域であり，北上山地とともに東北日本における重要な地質単元の一つである．いわき市平と須賀川市を結ぶ線を境として，阿武隈山地の南部と北部では深成岩・変成岩類の分布の様子が異なる．南部では深成岩類は変成岩類を間にはさんで独立した岩体をなすが，北部では幅広く分布する深成岩類が大きなバソリスを構成している．今回公刊された「川前及び井出」図幅地域は，北部阿武隈山地のバソリス地帯の南東部に位置し，図幅内のおよそ3／4の地域に前期白亜紀の深成岩類が露出する．この図幅の作成は，地震予知のための特定観測地域の1つである「宮城県・福島県東部地域」の図幅作成計画の一環として行われたものであり，現地調査は平成8年度から10年度にかけて実施された．その特定観測地域の図幅作成計画により阿武隈山地東縁部では北から南に向かって「角田」図幅（1988），「相馬中村」図幅（1996），「原町及び大甕」図幅（1990），「浪江及び磐城富岡」図幅（1994）の4葉の図幅がすでに公刊されており，最南部にあたる今回の「川前及び井出」図幅の刊行をもって同計画は終了した．本図幅地域の南半分は，1961年に公刊された「平・川前（付井出））」図幅と重複している．

図幅説明書は従来のB5版からA4版へと変更されており，3年間にわたる調査・研究の成果が136頁の本文としてまとめられている．

図幅説明書の本文は，第I章：地形，第II章：地質概説，第III章：変成岩類，第IV章：時代未詳の堆積岩類，第V章：ペルム紀堆積岩類，第VI章：時代未詳の火山岩類，第VII章：貫入岩類，第VIII章：上部白亜系双葉層群，第IX章：第三系，第X章：第四系，第XI章：地質構造，第XII章：活断層及び地震活動，第XIII章：応用地質，文献，付図および英文要旨から構成されている．このうち久保・高木の執筆による第VII章に21頁，利光による第VIII章に14頁，柳沢による第IX章に41頁と多くのスペースがさかれ，貫入岩類，双葉層群および第三系に関する記述内容が充実している．他の章は上記の人を含めた多様な分野の研究者によって，わかりやすくコンパクトにまとめられている．

本図幅の最も大きな特徴は，図幅地域の中央部をほぼ南北方向に延びる畑川破砕帯と，その東方約8kmを走る双葉破砕帯によって，本地域内に存在する先デボン系から完新統までの地層と岩体の分布が3分割されていることである．図幅はさまざまな岩石と地層の配色の調和がよくとれており，非常に見やすい．

畑川破砕帯に沿って，本地域の最古期の岩石であり，南部北上帯の松ヶ平・母体変成岩類（低温高圧型変成岩類）に対比される八茎変成岩類が露出する．八茎変成岩類の西側の地域には前期白亜紀の阿武隈花崗岩類が，東側の地域には北上山地の白亜紀花崗岩類に対比される花崗岩類が貫入している．後者の南東縁部は，フタバスズキリュウの産出で知られている上部白亜系の双葉層群と，石炭層を挟む古第三系の白水層群に不整合に覆われている．双葉層群では，非海成層から海成層へのサイクルが大きくみて3つ見られる．白水層群は，陸成層に始まり上位に向かって海成層に変化する海進的な堆積相を示す．

北上山地の花崗岩類に対比される花崗岩類，双葉層群および白水層群を切って，幅1－2kmの双葉破砕帯が発達している．双葉破砕帯内には破砕帯の伸びの方向と平行に時代未詳の変成岩類，ペルム紀堆積岩類，白水層群および新第三系の湯長谷層群と白土層群が帯状に分布している．双葉破砕帯以東の地域には，ゆるく傾斜した新第三系の仙台層群大年寺層と第四系が露出する．双葉破砕帯内の変成岩類と堆積岩類の傾斜がほぼ垂直ないし高角度であるのに対して，その東側に分布する大年寺層の傾斜がゆるく，大きな違いがあることが地質平面図と2本の地質断面図にはっきり描かれており，印象的である．図幅地域は常磐炭田地域の北端部に位置しており，第三系の地層と層序については古くから数多くの研究がなされてきた．説明書ではそれらの成果がよく総括されているとともに，多数の詳細な地質柱状図，貝類化石と珪藻化石のリスト，2つの凝灰岩のフィッショントラック年代，常磐地域に分布する第三系の年代層序，常磐・石狩および釧路炭田地域の古第三系の地層対比，および多数の露頭写真などが新たに示されている．

図幅地域の西半分に露出する阿武隈花崗岩類は，チタン鉄鉱系列の角閃石含有黒雲母花崗閃緑岩と淡紅色黒雲母花崗岩に大別されている．畑川破砕帯以東に分布し北上花崗岩類に対比される貫入岩類は，磁鉄鉱系列に属し，北部の大倉山石英閃緑岩と玉ノ湯花崗閃緑岩，中央部から南部の大久川花崗閃緑岩に区分されている．畑川破砕帯以西の花崗岩類が阿武隈山地の主部を構成する阿武隈花崗岩類に連続するのに対して，同破砕帯以東の花崗岩類が北上花崗岩類に対比されることは，すでに「原町及び大甕」図幅（1990）や久保・山元（1990）において指摘されている．この指摘は，阿武隈山地東縁部の図幅調査で明らかにされた重要な知見の一つである．説明書には八茎変成岩類を貫く花崗岩岩脈や花崗岩類の貫入関係を示す露頭写真，および代表的花崗岩類の鮮明な岩石研磨写真と顕微鏡写真がいくつか掲載されており，貫入岩類の全体像が把握しやすい．

阿武隈山地東縁部の深成岩類については，渡辺ほか（1955）やSendo（1958）の報告のあと長い間，本格的な調査・研究が行われていなかった．このような状況のなかで，筆頭著者を中心とする研究者の努力より，このたび阿武隈山地東縁部の連続した5葉の図幅が完成し，深成岩類に関する多量の情報が新たに提供されたことは，誠に喜ばしい．今後それらの情報に基づいて，深成岩類の起源物質や生成過程，ならびに畑川・双葉破砕帯を生じた構造運動と深成活動との関係を解明する研究などが展開されることを期待したい．

本図幅が，地震予知のための特定観測地域の地質図として出版された割には，第XII章の活断層及び地震活動の記述が半頁にも満たないのはもの足りない．図幅は6,000円と高価であるが，その中に盛られた地質情報の豊富さや重要性を考えると，致し方ないことであろう．

（田中久雄）

「法人化に関するワークショップ提案：資料（1）法人における活動と基金について」

日本地質学会は生まれかわります

公益（社団）法人となり、
大きく発展すること
をめざします。

あなたもこの再生に合流を！

法人化準備委員会

なぜ、今、発展が必要なのでしょうか？

- 地球環境と生命の未来の正確な予測が今ほど求められていることはありませんでした。
- 未来予測の鍵は過去と現在を「良く知る」にあります。
- 地球と生命の過去を最も良く知る「地質学」の飛躍的発展は正確な未来予測に不可欠なのです。

なぜ、今、法人なのでしょうか？

- 日本地質学会は１８９３年の創立以来、１１０年間、いわば単なる「同好会」（＝任意団体）でした。
- 今やあらゆる研究教育機関、主要な学会、企業が法人である社会において、対等の立場でネットワークを先導するには法人であることが絶対に必要です。

どのような学会になるのですか？

- 国際的にも国内的にも地球生命科学の最前線を担う、旺盛で大胆な活動を展開します。
- 地球環境未来予測、自然災害未来予測、社会貢献のために活発で、機敏な活動を展開します。
- 次世代の創造、地質学の国民的理解を広げるための活動を強力に展開します
- 国際社会、国家、地域社会に対して専門家集団として権威ある提言をします。

任意団体としての限界

- 例１：IGC(万国地質学会議）において日本地質学会は寄付金の受託団体とはなれず、（社）東京地学協会に依存した。
- 例２：JABEE(日本技術士教育認定機構）の資格認定団体となりえない。

結論：地質学会の主導する活動が著しく制限されている。

社団法人となるためには何が必要ですか？

文部科学省の認可が必要です。

そのためには

- 財政の透明性
- 民主的な意志決定システム
- 情報公開の徹底
- そして明確な社会貢献

という当たり前のことが必要です。

法人化によって変わる！戦略

- 抜本的初期投資（1億円）
- 機動的運営
- 魅力的な会員サービス
- 若い学会員の獲得
- 活発な活動の展開

新しい地質学会のためにあなたの力が必要です。

- 活発な研究活動の成果を学会へ。
- 様々な活動へ積極的に参加を。
- 創意に溢れた御意見を。

そして、

- 学会の未来への大胆な投資を！

基本財産は２千万円、活動の抜本的改革のために１億円の基金を！

発展を保証するのは 人材！

- 若い人材が流れ込む中で法人化を実現
- 若い人材が定着する中で法人の発展
- 若いリーダが育つ中で法人の発展

抜本的初期投資：
２０代会員倍増計画の
戦略的推進

年会を魅力溢れる充実したものへ

- 会員の提案による創意あふれるbottom-up
- 行事委員会など提案の重点セッションtop-down のバランスある配置
- 合同大会セッションの見直し

例：基礎的地球環境学に関わる
統合シンポジウム（千葉大会）
地球諸科学の連係と地球環境科学の体系
（大気海洋観測、極域モニター、地下水観測サテライトモニター、地球環境学の文理融合の体系など）
大会開催時には特集新生地質学雑誌が発行されている

現状：地質学会学生・院生会員　約５００名

市場：地球惑星・環境関連学科、大学院学生数、約4,000名？（理学系のみ）
環境関連学科：総数１万５０００人
理学系１５%、工学農学系：６０%+、文系・総合系２５%、

意識調査：
学会発表のために入り、用が終わると定着せず、脱会。
魅力がない。役に立たない。
払った会費に見合わない。

↓

若い会員大量加入・定着の鍵

・未来発展への力強い展望
・情報の量と質と速度
・活発で明るいコミュニケーション

具体的作業・日程

情報発信の検討

- Web 外向け情報の充実と体制：
  Web委員会：平成１６年度1月発信開始？
- 地質学雑誌、ニュース誌刷新：
  研究企画委員会・編集委員会合同会議

基本路線の変更方針の承認：６月28日評議員会
新編集発行開始：平成16年1月号

定着、新会員加入一大キャンペーン
平成１６年３月－６月
会計年度変わり目、合同大会、学会締めきり６月末

情報発信の大幅改善

- Web site ：内向き発信から外向け発信へ！
- ニュース誌：科学・技術・行政・教育の最先端トピックを！

科学情報：特定領域、科学研究費Aなどの科学計画の紹介、プロジェクトの研究紹介など、突発自然（災害）現象、人災情報
技術情報：先端技術（測定・観察、モニター、分析にかかわるハード・ソフト）
行政情報：環境、防災、教育、国、地方自治体、地球関連政策
国際情報：国際プロジェクト、主要国プロジェクト、国際地球関連政策、
就職情報：売り、買い、就職動向の分析
教育情報：大学改革、教育改革、top-downとbottom-upの現状

法人設立千葉大会大成功へ

- 記念シンポジウム
- 地球の未来と地球環境学？
  シンポジウム実行委員会の早急な発足：実行委員長
- 法人設立記念総会準備
  準備委員会：マスコミ、関連学会、コンソーシアム、大学、業界、などなど

地質学雑誌の大幅改善

書棚に並べて置きたい学界専門雑誌No.１！

- 内容を地質科学と技術に関する総説、解説的教育的特集に集中する。
  （日本語であることを売りにする）

（移行措置）
日本語による優れた論文は？
英語で書くことを推奨し、Island Arcへ
日本語による優れた記載的論文は？
産総研地質調査総合センターとの契約により、
地質調査研究報告へ

内容を電子媒体としても発行する：
会員はWeb siteからdown load可！

募金キャンペーン

- 達成目標：１億円
- 開始：６月評議員会
- 期限：12月末：
- 体制：募金委員会：
  委員長：副会長、委員：全評議員、支部長
- 呼び掛けメッセージ：会長プラス著名名誉会員
- キャンペーン：ニュース、Web、パンフ

法人化準備委員会（03／06／03）

学会法人化に関するワークショップ　　討議資料

日本地質学会　法人化準備委員会

下記日程で学会法人化に関するワークショップを開催します．多くの会員のご参加，ご意見をお願いします．

日時：2003年6月27日（金）午後3時から4時半
会場：　北とぴあ（７Ｆ）第１研修室
　　東京都北区王子1-1
（ＪＲ京浜東北線・地下鉄南北線　王子駅下車徒歩2分）

日本地質学会の社団法人化については第109年新潟総会で審議が行われ，法人化準備委員会を設置して具体的な準備を進めることが承認されました．準備委員会ではこの間，政府による「公益法人」の見直し作業の進展状況や文部科学省の方針なども考慮しながら，法人における学会活動検討WG，法人運営と移行検討WG，募金WGの３つのWGでの検討をもとに準備を進めてきました．

2003年度日本地質学会静岡総会においては，社団法人「日本地質学会」における日本地質学会の学会活動の抜本的な改革方向と組織運営方式（定款），法人化にあたっての募金活動の進め方，組織移行の進め方などを審議し，2004年千葉大会において社団法人「日本地質学会」の発足を目指します．このワークショップでは諸提案の大枠を提示して，会員各位の意見も聴取したうえで最終的な案を作成することとしました．

提案内容の大枠は以下のとおりで，ホームページにも公開しました．

その1.　社団法人「日本地質学会」の活動と基金について

日本地質学会は法人化に際し従来の活動を抜本的に改革することを大きな目標に据えています．そこでは，国内外における地質科学の発展を牽引する学会として，アジア諸国をはじめ，国際的な課題にも対応しうる力量を備えること，教育と普及，研究における社会的貢献を推進し，教育関係者，研究者，技術者，一般市民など諸階層の多様で幅広い要望にも応えうる組織的な活動を行い，厳しい経済環境にある関連民間企業との協同などもあげられています．また，次代を担う牽引者としての若い層にも魅力のある学会として，かなり大胆な発想・提起を行っています．さらに，そうした抜本的改革を進めうる財政的裏付けのために，総額1億円という大規模な資金集めを提案しています．

まだ細部の詰めと検討は必要ですが，これまでの地質学会の活動を発展的に転換させるものとして，広く討論されることを期待しています．

その２．組織・運営方式について

2002年度新潟総会において提示された討議資料（ニュース誌，５巻８号に掲載）にもとづいて組織・運営方式と役員および代議員等の選挙方式の大枠を資料１および２に示します．準備委員会においては運営と移行WGにより，現行の会則･運営細則と法人化した場合の定款と学会規則の関係などについての検討をすすめ，６月の評議員会では法人組織における学会運営の大枠と役員・代議員の選出方式について審議していただく予定です．評議員会に先立って行われるこのワークショップでは，会員各位に準備委員会としてこれまで検討してきたことを報告するとともに，広くご意見をいただき，評議員会での審議に反映させたいと考えています．

学会の組織・運営は，会則とその下にある運営細則･役員選挙細則にもとづいて行われますが，社団法人となる場合にはまず定款を定める必要があります．上記の討議資料に示した定款案（ｖ.4）は，前年度の法人化調査検討委員会によるものです．定款においては，組織運営方式の骨格のみを示すのが通例ですので，現行の会則を定款に盛り込む部分とそうでない部分にわけ，後者は現行の運営細則・役員選挙細則とともに学会規則として定めることになります．定款については文部科学省の定款モデルに従うという一定の制約がありますが，その下で定める学会規則には制約はありませんので準備委員会としては，これまでの組織運営方式を最大限生かす形で学会規則を作成し，任意団体から社団法人への移行をよりスムーズにおこなえるのが良いと考えています．

新潟総会で提案された社団法人化する場合の組織運営方式についての基本的な考え方はつぎの2点に集約されます．

1）社団法人では総会の定足数は1/2以上の条件が課されることから，代議員制を採用する．代議員制のメリットを積極的に生かすことを検討する．
2）社団法人では理事会が全責任を負うことになる．従って，現行の総会－評議員会－執行委員会という組織形態は総会－理事会とすることになるが，これまで評議員会が果たしてきた役割は大きく，これに代わる機関を学会規則として定める．

このような考え方にたって，まず正会員による選挙で選出された代議員が理事を互選し，代議員の中の常任代議員（評議員）により常任代議員会（評議員会）を組織することによって，これまで評議員会が果たしてきた役割を担わせるという組織運営方式が新潟総会での提案でした．

このワークショップにおいては，この提案にもとづいて作成した組織運営とその問題点を説明し，ご意見を伺う予定です．

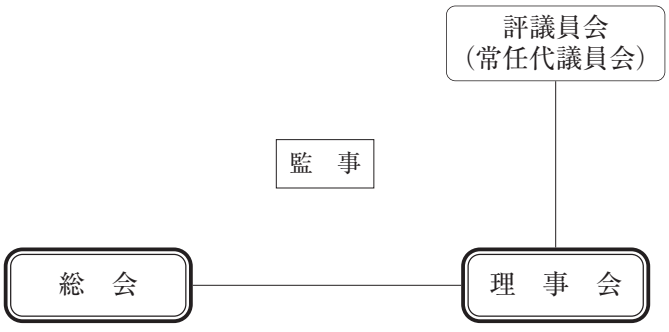
ご意見･ご質問をお寄せ下さい

当日参加できない方でも，以上についてご意見･ご質問があれば事前に地質学会事務局宛にお寄せください（郵便，Eメール，FAXいずれも）．

〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15　井桁ビル
日本地質学会　法人化準備委員会
FAX　03－5823－1156
Eメール　main@geosociety.jp

法人化ワークショップ討議資料　付録1

総会・理事会・評議員会（常任代議員会）の関係



（定款外で，学会規則として定める）
- 会長の諮問に応じ，理事会に助言する
- 年5回，1/2で成立，役員は出席する
- 全国区代議員選挙の得票順に所属別充足数を考慮して毎年20名を選出計40名で構成
- 名称は今後の検討課題

- 役員（理事17，監事2）と代議員160名で構成（定款案では理事15～20，代議員170～220としている）
- 年2回（3月，9月），1/2で成立（年1回についても検討する)
- 代議員は正会員による選挙（毎年，所属別充足数考慮：全国区50名，地方区50名を選出，任期2年，欠員についてはその都度，全国区，地方区ごとに補充）
- 正会員は総会に出席，意見を述べることができる（定款）

総会の権限事項以外の事項を議決し，執行する（定款）
- 会長1，副会長2，その他の理事14名で構成；任期2年，毎年半数改選
- 年10回以上，2/3で成立
- 会長1，副会長2および監事1は正会員による選挙（定款上は理事の互選）
- 会長，副会長以外の理事は，その年度に選出された代議員の中から，立候補により代議員が選挙，当選した者は代議員から除く

法人化ワークショップ討議資料　付録2

理事，代議員および評議員（常任代議員）の選出方法

代議員200名，理事14名（会長1、副会長2を除く），評議員（常任代議員）40名とし、それぞれ任期2年，毎年半数交代とする．（会長1，副会長2および監事1は正会員による選挙）

代議員の選挙

・定数を全国区50，地方区50とし，候補者は自薦および他薦(本人の承諾書必要)とする．
・選挙者は正会員で，全国区および地方区について投票．
・全国区は25名以下の連記，地方区は定数以下の連記．
・全国区の選出には所属別定員充足数を考慮．
・地方区の区分は支部の区分に準じ，選挙者および被選挙者はその地方区に居住(または勤務)している正会員とする．
・全国区および地方区とも，得票数が同じ場合には年少順に当選者とする．

理事の選挙

・定数は7とし，被選挙者はその年度に代議員に選出された者(立候補による)
・選挙者は代議員(前年度選出者を含む)で，定数以下の連記．
・投票は7名以下の連記により行い，有効得票数の多い順に当選者とする．
・理事に当選した者は代議員から除き、欠員はその年度の代議員選挙結果にもとづいて補充．

評議員（常任代議員）の決定

・全国区代議員の選挙結果にもとづいて年度別定数20名を，所属別定員充足数を考慮して決定．

問題点

・理事および評議員 (常任代議員)の選出方法をあらかじめ代議員の選挙にあたって正会員に徹底しておく必要がある．
・評議員 (常任代議員)、評議員会 (常任代議員会)の呼称．
・地方区で選出された代議員が理事に選ばれた場合の地方区代議員の補充方法（該当者が得られない可能性）．
・選挙日程についての検討（現行の日程を延長する必要がある）．

IGCP-440国際シンポジウムとLEGENDS集会（2003年３月，スリランカ）

吉田　勝[1]　小山内康人[2]　大和田正明[3]　中野伸彦[2]

（[1]ゴンドワナ地質環境研究所　[2]岡山大学教育学部　[3]山口大学理学部）

IGCP-440の国際シンポジウム「ロディニア・ゴンドワナテクトニクスとスリランカ」及びLEGENDS（Lithospheric Evolution of Gondwana East from Interdisciplinary Deep Surveys）討論会が３月29日と30日にスリランカの古都キャンディで行われた．会場のスリランカ国立基礎科学研究所はキャンディ南の郊外にあり，キャンディの喧騒を離れ，緑多い静かな丘の上にある．参加者はオーストラリア，中国，ドイツ，インド，日本とスリランカの６カ国20人ほどで，日本からは筆者ら４人が参加した．なお，30日からは関連のフィールドワークショップもあったが，これは別に報告する．

開会セッション：開会式，シンポジウムとも，基礎科学研究所の講堂で行われた．開会に先立って，今年１月に突然死去したP.G.Cooray教授を悼んで黙祷を捧げた．シンポジウム世話人のK.W.D. Kehelpannala教授と主賓のK. Tennakone基礎科学研究所長の歓迎挨拶のあと，LEGENDS関係の特別講演２題があった．

Rodinia assembly and break-up and LEGENDS proposal（A. Kröner）．

Seismic traverse across India and Sri Lanka（P.R. Reddy）．

シンポジウムでは，講演要旨集に収められた23の発表要旨のうちキャンセルを除いた17題が３分科会に分けて順次発表された．

セッション１．スリランカと南インドのグレンビル及びパンアフリカ変動： A. KrönerとW.K.N. Prameの座長で，以下の７講演があった．

１．A commentary on Grenvillian event in Sri Lanka（M. Yoshida and others）

２．What happened to India and Sri Lanka during the Proterozoic?（I. Braun and others）

３．Cooling rates of the Precambrian basement of Sri Lanka: problems and perspective（G.W.A.R. Fernando and others）

４．Constraints on the nature and delineation of the Highland Complex/Wanni Complex boundary, Sri Lanka（R. Kleinschrodt and W. Pouillon）

５．Evolution of the highest-grade metamorphic rocks from central Highland Complex, Sri Lanka（Y. Osanai and others）．

６．The Cauvery Shear Zone, Southern Granulite Terrain, southern India: evidence of Neoproterozoic transpressional tectonics（T.R.K. Chetty and Y.J. Bhaskar Rao）

７．Evolutionary history of the 550 Ma Southern Granulite Terrain, south of the Palghat-Cauvery Shear Zone, southern India: implications of the assembly/breakup of eastern Gondwana （A.S. Janardhan）

セッション２．ロディニア，ゴンドワナのテクトニクスと火成作用：M. YoshidaとLu. Songnianの座長により，以下の５講演が行われた．

８．880-1000 Ma magmatic event(s) in the Wanni Complex of Sri Lanka and speculation on their relevance for Rodinia and Gondwana super-continent formation.（A. Kröner and others）．

９．Efficacy of deep seismic reflection and refraction studies in imaging crustal scale shear zones - experiences in Southern Granulite Terrain of South India and strategies for the new initiative（P.R. Reddy）．

10．The tectonic architecture of central and northern Madagascar and their role in the final assembly of Gondwana（A.S. Collins and others）．

11．Timing of magmatism and metamorphism in the Mashan Complex of NE China: a consequence of a Siberian or a late-Pan-African Gondwanan collision?（S.A. Wilde and Fuyuan Wu）．

12．Retrograde tectonothermal events in the Napier Complex, East Antarctica: correlation with the East Gondwana fragments （M. Owada and others）．

セッション３．中国の地質・テクトニクス過程：S. A. WildeとA.S. Janardhanの座長で以下の４講演があった．

14．Precambrian outline of Northwest China（Lu Songnian）

15．Assembly, accretion and break-up of the Palaeo-Mesoproterozoic supercontinent Columbia and its records in the north China Craton（Gouchum Zhao and others）

16．Geology, petrology and geochemistry of Neoproterozoic granitoids of the Qinling Orogen, Central China, and its geological significance（Chen Zhihong and others）．

17．Late Proterozoic magmatism within the Dabie-Sulu Collisional Belt, eastern China: response of the Yangtze Block to the break-up of Rodinia?（Fukun Chen and others）．

シンポジウムで印象的だったのはA. Kröner の講演（No.8）や発言であった．彼はかつて（1991－1994）ドイツグループのリーダーとして，1990年頃までGrenvillianとされてきたスリランカの高度変成帯をすべてパンアフリカ期とした仕掛け人であった．しかし今回のKehelpannalaとの共同発表では，Grenville期の変形事件の存在を強調した．また，吉田らによるスリランカのハイランドコンプレクス10億年変成作用説の講演（No.1）についても，むしろ支持に近い発言を行った．スリランカの高度変成岩類のパンアフリカ説は，南極のリュッツオホルム湾やプリッズ湾地域のそれと共に，最近のパンアフリカ期東ゴンドワナ形成説に重要な役割を果たしているが，その根拠に対しての疑問がついに本家から始まりつつあると感じられた．

LEGENDS討論会（座長：A. KrönerとP.R. Reddy）

シンポジウムの後，LEGENDSに関する討論会が，29日と30日の夕方に行われた．ここでは東アフリカ，マダガスカル，インド洋，インド，スリランカ，南極を結ぶLEGENDS全体計画の進展状況と，南インド－スリランカ深部地殻探査計画の提案が紹介された．

LEGENDSの進展状況はKrönerによって説明された．LEGENDSは各国で積極的な評価を得つつある．米国ではインド・米国共同研究として，南インドの深部地殻探査計画がコーネル大学のL. BrownによってNSFに提案された．インドでは，インド南部グラニュライト地帯の南北断面の地震探査計画がインド科学技術省によって承認され，ハイデラバードの国立地球物理学研究所などが中心となって実施する．日本では南極エンダービーランド西部からリュッツオホルム湾に至る深部地殻探査計画（SEAL計画）が文部科学省で承認されており，国立極地研究所などを中心に一部がすでに実施され，さらに今後５年間の継続が決まってる．

インド深部地殻探査計画と，これをスリランカまで延長する計画は，P.R. Reddyによって詳しく紹介された．インド側の実施体制は出来ているが，この計画の完成にはスリラン

カ側の研究体制と政府レベルの積極的な協力が必要であることが認識された．また，大陸間横断調査の各種の問題点が指摘された．多くの議論の後，以下の諸点が合意された．

１．深部地殻探査計画の中心は地球物理学分野であるが，多領域かつ国際的な協力研究が必要である．とくに地質構造，岩石学，岩石化学，年代学などの地質学情報は探査ルートの正確な位置選定と探査結果の解釈にとって基本的に重要であり，地質研究者の緊密な協力は不可欠である．

２．インド－スリランカ深部地殻探査計画には，スリランカ側では基礎科学研究所と地質鉱産局が参加する．この両機関の努力で政府レベルの承認・協力も得られると期待する．

３．アフリカ，南極等を含むLEGENDS全体計画の推進についてもさらに多くの議論があった．各地の地元の研究者が参加する必要があること，いろいろな分野についての先進国，後進国それぞれの重要な役割が認識された．

４．LEGENDSのような巨大計画の推進には，高いレベルの国際組織のバックアップが必要である．すでにILP，IGCP，欧州科学基金，あるいはEUの諸学会や各国政府等の一部には，承認されているが，更に積極的・具体的なサポートを得るための努力を継続する必要がある．

５．LEGENDS全体計画を効果的に推進するためのLEGENDS国際委員会を発足する．

６．地震波探査や関連の地質調査のための資金獲得は，各国で独自に行うが，LEGENDS国際委員会はそれに対して助言やサポートを行う．

７．今年11月－12月頃に南インドの探査予定ルートを対象に，国際野外巡検を行う．P.R.Reddyがこの世話役をする．

上記のように，LEGENDS計画には地質研究者の積極的な参加が求められている．また，日本の南極グループはSEAL計画に大きく関わっているが，一方広くゴンドワナランドの各地を研究対象とし，あるいは地殻テクトニクスに関心を持つ研究者は，上記の米国やインドの計画に積極的に参加することができる．差し当たりインドの国際巡検が計画されているが，今後東ゴンドワナのいろいろな地域で同様な巡検や共同研究が行われるであろう．広い範囲の研究者の積極的な参加が期待されている．なお，日本におけるLEGENDS推進のコンタクトパーソンは，現在のところ地球物理関係では国立極地研究所の金尾政紀氏が引受けている．また，地質関係の情報は吉田が提供できる．ご興味の方はお問い合わせ下さい．

シンポジウム参加者，前列中央がシンポジウム世話人のK.W.D. Kehelpannala，左にA. Kröner とP.R.Reddy

「青少年のための科学の祭典2003全国大会」開催

今年も「青少年のための科学の祭典」全国大会が開催されます．地球科学関係の出展も多数予定されています．たくさんの方々のご来場をお待ちしています．

開催期間　**2003年7月24日（木）～28日（月）**
開催場所　科学技術館　一階催事場（東京都千代田区北の丸公園）

科学の祭典ホームページ　http://ppd.jsf.or.jp/shinko/pro/ysf/

前後半通し　**ピンポン球雪崩実験**
前半（7月24～26日）　**砂を鳴らして「鳴り砂」の不思議を知ろう**
化石のレプリカを作りましょう
琥珀（コハク）原石を磨こう！
後半（7月27～28日）　**石の中から宝石（ガーネット）をとりだそう**
ペットボトルで地震の再現
鉱物染色（黄土、朱土、紫土）　その他多数

お知らせ

新潟大学理学部地質科学科・大学院自然科学研究科 地球史セミナー

梅津慶太（M2）・武井雅彦（D3）

概要・特色

みなさんこんにちは．新潟大学地球史セミナーです．当セミナーはおもに古生物学に関する研究をおこなっている教官，学生で構成されています．まず教官は田沢純一教授（古生代腕足類），松岡篤教授（放散虫），新川　公助教授（古生代サンゴ）の３名です．学生は博士後期課程１名，博士前期課程３名，学部４年生４名であり，さらに学振特別研究員（PD）の２名が参加しています．セミナーは日本海と佐渡島が見えるゼミ室で，毎週月曜日の朝９時から(朝早いです)，担当者が研究成果や研究の進捗状況について発表し，それについて議論を交わしています．時にはゲストとして，他のセミナーの方に発表をしていただくなど，オープンなセミナーを目指しています．

当セミナーの特徴は，教官の専門分野が多様で，３つの研究室が集まっていることから，メンバーの研究内容が非常に多岐にわたっていることです（下記参照）．セミナー内でも，中･古生代の化石から，現世の放散虫，オフィオライトなどの発表がおこなわれ，それに対して様々なコメントが挙げられます．また，セミナーの異なる他分野の院生が参加し，より多様な研究内容を聴くことや，それについての議論を戦わせています．このように，様々な分野の研究を聴き，コメントをもらうことで，野外での調査の視点や，化石に対する考え方を新たにでき，自己の研究に取り組むことができるセミナーです．それではメンバーと研究テーマについて紹介いたしましょう．

メンバー紹介と研究内容

植田勇人：宮下研：学振特別研究員（PD）

北海道イドンナップ帯を対象として白亜紀の前弧地殻の復元，およびその全体像と発達過程の解明が主なテーマです．地質学会奨励賞に輝いた実績もあり，様々な視点でのコメントをしてくれます．が，本当はオフィオライトセミナーからゲストとしての参加にはじまりました．しかし，今や地球史セミナーの中心的存在になりつつあります．

栗原敏之：田沢研：学振特別研究員（PD）

本年度，筑波大学からやってきました．古生代の放散虫生層序学ならびに，飛騨外縁帯を中心とした構造発達史の解明がおもな研究テーマです．まだ新潟大学に来てそれほど経っていませんが，すでにメンバーにとけこんでいます．新潟の夜の街で“新潟の酒”を呑み歩くことを熱望しています．

武井雅彦：松岡研：博士後期課程３年（D3）

西南日本に分布する鳥巣層群の層序学的研究と，ジュラ紀後期アンモナイトの古生物学的研究を行っています．松岡研の最年長であり，学位取得へ向け正念場を迎えています．セミナー最古参でもあり，そのせいかどうかは知りませんが，学生の良き相談役になっています．なおジュラ紀アンモナイトに関する情報を募集中です！どしどしお寄せください．

佐藤洋子：松岡研：博士前期課程２年（M2）

宮古層群から産出するウミユリの古生態学的研究を行っています．さらにウミユリの古生態から，中生代海洋変革（MMR）を解明しようと研究を進めいています．ウミユリばかりではなく，棘皮動物全般が好きで，それに関する本をたくさん持っています．

梅津慶太：松岡研：博士前期課程２年（M2）

下部白亜系の花粉・胞子化石についての研究を行っています．卒業研究では福井県の手取層群の花粉・胞子化石分析を行いました．現在，修士研究では岩手県の宮古層群の花粉・胞子化石分析を行っています．また，セミナーのホームページ係を担当しており，ネタに困りながらも随時更新しています．ただいまホームページのネタ募集中です．

待鳥　暁：松岡研：博士前期課程２年（M2）

現世放散虫の飼育実験を行い，その生物学的見地から日本海の古海洋環境を推定すべく，現在は佐渡島へ島流し状態（夏季限定）でいます．本人は英語でこう述べています「I live with radiolarians !」．新潟へお立ちよりの際はぜひ佐渡島へ足を伸ばし，彼のもとをたずねてみてください．

佐藤義孝：田沢研：学部４年（B4）

南部北上帯日頃市地域でシルル紀，デボン紀の地質と微化石について研究しています．レスラーなので鍛え上げられた肉体の持ち主です．フィールドを歩いて歩いて歩きまくり，そのマッチョな体を維持しています．

中井　亮：田沢研：学部４年（B4）

滋賀県彦根地域の霊仙山周辺の石灰岩を対象に，フズリナによる生層序学的検討をテーマにしています．地質調査にツーシーターの愛車で現れます．しかし，卒論のフィールドには実家の車を借りていくらしいです．

吉岡　翼：松岡研：学部４年（B4）

岡山県出谷地域の下部白亜系の地質とカイエビ化石について研究しています．カイエビを我が子のように育てていて，地球史セミナーのカイエビトップブリーダーとなりました．

柿崎喜宏：松岡研：学部４年（B4）

福島県の相馬中村層群中の小池石灰岩をメインに卒業論文に取り組んでいます．炭酸塩岩に興味を持って熱心に勉強しています．

以上のようなメンバーで活動を行っています．なお，セミナーの活動内容などが満載のホームページもありますので，ぜひ訪れてみてください．お問い合わせは梅津（E-mail：f02f451c@mail.cc.niigata-u.ac.jp）または武井（E-mail：F01L215J@mail.cc.niigata-u.ac.jp）までお願いします．

新潟大学地球史セミナーURL
http://ataka.sc.niigata-u.ac.jp/group/earth-history/index.htm

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の３名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

tomaru@gbs.eps.s.u-tokyo.ac.jp　戸丸　仁（東大）
t02h106@amail.shinshu-u.ac.jp　北沢俊幸（信州大）
601g5049@mn.waseda.ac.jp　髙橋昭紀（早稲田大）

院生コーナー

編集新メンバー紹介：
髙橋昭紀　E-mail: 601g5049@mn.waseda.ac.jp

今年度より，地質学会News誌院生コーナーの編集の手伝いをさせていただく髙橋昭紀と申します．現在，早稲田大学大学院理工学研究科環境資源及材料理工学専攻地質学部門の博士後期課程３年生です．専門は古生物学・生層序学で，白亜紀の代表的な海生二枚貝類であるイノセラムス類が，セノマニアン－チューロニアン期境界に生じた大量絶滅事変に対してどのような応答を示しているかを研究しています．また，イノセラムス類のサイズ分布の経時変化と海洋環境変動との相関についても興味を持っており，最近研究にとりかかり始めたところです．

近年の院生コーナーに目を通しますと，多くの院生が世界各地の学会に積極的に参加して，まさにグローバルに活躍されている様子がよく伝わってきます．自分も負けないように頑張らねば，と身の引き締まる思いです．これからの地質学の担い手である院生の方々の重要な交流の場において，微力ながらも尽力できることを嬉しく思っています．どうぞよろしくお願い致します．

追　悼

山本　聰　教授を悼む

山本聰教授は1948年２月に北海道西海岸の網元の長男として誕生，1970年に北海道大学理学部地質学鉱物学科を卒業．同年11月にWoods Hole海洋研究所に研究生（約１年後には研究所員）として渡米した．その後1973年にSyracuse 大学大学院（New Yor）に入学し，最短コースで1977年８月にPh.D. を授与された．Woods Holeでは，K. O. Emeryらが集中的に採取していた東アジア沿岸部の懸濁物質の解析を行い，本庄丕・Emeryと共著論文（Sedimentology, vol. 8, 1974）に成果を発表．Syracuseに進んでからも，その時の約400サンプルの各種パラメーターについて多変数解析を試み（J. Math. Geol., vol. 8, 1976），さらに光学的異方性を持つ鉱物粒子は沿岸のものほど平均粒径が小さくなるなど，海洋環境との関係を示した（日本海洋学会誌，vol. 35, 1979）．これらは，現在も数理地質学の第一線に立つ Syacuseでの指導教授Daniel F. Merriamの示唆に基づく．その後も恩師Merriam教授との密接な交流が続いていた．学位論文は，深海におけるcabonate-silicate cyclic sedimentationの堆積化学的研究であって，後に海山上のチャート・ノジュールの成因を加味してPalaeo-3, vol. 105, 1993に公表している．また，以後に発表されてきた遠洋性・半遠洋性チャートにおける微量金属元素の挙動に関する研究へと発展した．

1978年11月に新設間もない琉球大学海洋学科堆積学講座に赴任してからは，こうした経験を踏まえて，同講座の発展に尽力された．マッフル炉による炭酸塩等や，原子吸光分析装置による金属元素の含有量測定は，大量に採取しつつあった琉球列島浅海部堆積物の分析に威力を発揮した．他のパラメーターも考慮した沖縄本島中城湾の堆積物に関する研究（私たちとの共著，Galaxea, vol. 2, 1983）は，その後の同様な研究の指針となった．沖縄では赤土流出が問題となっているが，懸濁物質の測定から赤土はflocculationのために河口域に大量に堆積し，外洋域には表層流に乗って一部が到達する，との結果を出している．河口域におけるマングローブ林の育成やサンゴ礁の保全にとって重要な成果であるが，環境対策問題では大きく取り上げられていない現況は残念である．

山本さん（常々，そう呼んでいるので）は，アメリカ帰りとは思えない（そうした意味では期待外れ？）温厚な人柄であった．しかしながら学術会議大平洋研連と琉球大学主催の大平洋学術会議中間会議が，橋渡し役をした私の退職後に1998年に沖縄コンベンション・センターが開催された際，山本さんは堂々たる司会振りを示され，その英語力に感服したものである．一方，分析等に関しては厳しく学生の指導に当ってこられ，少々杜撰な点がある私を補ってあまりあった．琉球大学理学部／長崎大学水産学部間の文部省単位互換制度により，1979年から毎年約10日間にわたる乗船実習が始まった．琉球列島周辺海域に限られるとはいえ，外洋堆積物の組織的収集が可能となり，1996年末までに合計53本のピストンコアを採取している．船酔いに強い山本さんには，毎年のように同実習に参加して頂いたが，1990年ころから腎臓悪化のために，洋上で共に語らう機会を失った．だが，人工透析を受ける身ながらも研究に打ち込み，25編以上の論文を発表してこられたのである．最近ではサンゴ礁海域におけるlime mud，特に，その走査型電子顕微鏡像に着目し，最新型走査電顕への更新も決まり，設置を心待ちされていたところところであった．また1997年に教授に昇任された頃から，改組された理学部物質地球科学科の中心的役割を果たされるようになった．しかし待望の腎臓移植も成功して，一層の活躍ができると喜ばれていた矢先，脳内出血で急死されてしまった．御意識があったならば，山本さん御自身が，どれほど残念であったか計りしれない．奥様も喜びの最中に，突如の御逝去を迎えられ，大層のお悲しみと伺っている．３人の御子息ともども，新しい人生を送られるよう，切に望んでいる次第です．

御遺族の御住所は，次の通りです．
〒903－0804　那覇市首里石嶺町１－157－５
山本恵美子　様

（**氏家　宏**）

訃報

本会の次の方々が逝去されました．謹んで哀悼の意を表します．

正会員　山下高徳（02.10.19）　袋瀬六松（1.30）
増山裕明（2.7）　山本　聰（3.23）

学　会　記　事

2003年度第３回定例評議員会議事抄録

2003年３月31日
日本地質学会　評議員会議長
在田一則

日時：2003年３月29日（土）13：00～17：30
場所：北とぴあ　901会議室
出席者：加藤碩一副会長，在田一則評議員会議長，井内美郎評議員会副議長
（02－03評議員）会田信行　秋葉文雄　阿部国広　天野一男　上砂正一　永広昌之　小松宏昭　榊原正幸　柴　正博　滝田良基　竹内　章　立石雅昭　楡井　久　觜本　格　松本俊幸　三宅康幸　矢野孝雄　渡部芳夫
（03－04評議員）足立勝治　伊藤谷生　大友幸子　狩野謙一　片山郁夫　木村純一　公文富士夫　紺谷吉弘　佐瀬和義　鈴木徳行　徐　垣　田崎和江　玉生志郎　新妻信明　廣井美邦　松田博貴　吉田武義　（事務局）橋辺菊恵
委任状提出：赤羽貞幸　周藤賢治　吉川周作　赤羽久忠　荒戸裕之　佐々木和彦　石渡明　斉藤尚人　柴崎直明　吉田史郎
欠席：平　朝彦会長，木村　学副会長
書記：秋葉文雄・小松宏昭
*議事途中に事務局より出席者37名，委任状提出10名で評議員会は成立しているとの報告があった．

報告事項

Ⅰ　執行委員会報告

１．運営財政部会

１）総務委員会

庶務関係

天野執行委員より次の報告があった．その中で特に最近の会員減少に関して，学生会員，院生の入会を促進することが必要であること，また高年齢の会員にできるだけ長くとどまっていただくため，会費の制度を検討するなどの必要があることが強調された．これに対して，どのように学会および学会誌の魅力を引きだすかについての議論が行われ，今後研究企画委員会で議論して答申を出してもらいたいとの要望が出された．

(1) 学術会議第19期会員選出に関する報告
① 学術会議会員候補者選出手続き（再開）について
・１月28日に会員推薦管理会より選出手続き再開の連絡をうけ，学会として候補者の選出手続き再開の報告，斎藤常正会員の立候補辞退により学会内選挙の必要がなくなったことを，執行委員長と評議員会議長の連名で会員に広報した（ニュース誌１月号）．
・２月14日に学術会議による推薦届けの事務的説明会が開かれ，「中間まとめ」に対しパブリックコメントが行われたが，「最終まとめ」までにはなお数回の専門調査会の開催が必要とされており，現時点では未定であることから，第19期の会員選挙は現行法のもとで行うこと，が説明された．
・届出締め切り，その後のスケジュールはつぎのとおり．
推薦届け締め切り　３月17日，
会員候補者の資格認定通知　４月中旬
推薦人会議（会員決定）：地質研連５月14日午後，鉱物研連５月15日午前，地質科学総合研連５月15日午後
② 地質学会が登録している３つの研連における学会推薦候補者および同推薦人の選出手続きについて先例に従い，評議員会でつぎのような手続きをとることとした．
１．地質学研連からの会員候補者については２名の推薦があったが，１名の方が辞退されたので，信任投票を行う．
２．会員候補者の推薦がなかった鉱物学研連および地質科学総合研連へは執行委員会からの推薦者を提示するとともに，評議員へも推薦を求める．
３．推薦人候補者についても，執行委員会からの推薦者の提示とともに，評議員からの推薦を求める．
４．推薦された候補者に対して郵便による投票を行い，得票の順に，ご本人の了解を得て候補者とする．
５．３月29日の評議員会での承認を受ける．

(2) 以下の共催，後援，協賛，名義使用等を承諾した．
・AGU Western Pacific Geophysics Meeting（2004年８月16－20日），Co-sponsorを承諾．
・2003地球環境保護土壌・地下水浄化技術展の協賛依頼(2003年９月10－12日，有明ビッグサイト)，名義使用を承諾
・International Symposium on Zeolites and Microporous Crystals（ZMPC 2003）（2003年８月６－９日，札幌コンベンションセンター），共催依頼を承諾．
・地理情報システム（GIS）学会より「技術士部門における選択科目の追加」（試験科目にGISを付け加える）に関する要望書提出に際し，GIS関連学会としての名義使用および連名願いについて依頼があり，了承．

(3) 次の転載依頼等について手続きを踏んで了承した．昨年中に申し込まれたものは，それまでのルールに従い，今年の分からは，新しいルールに従った．
・資源地質学会；21世紀の資源・環境地球科学→寺門靖高論文（地質雑107/354－357，図１）
・講談社サイエンティフィック；改訂宇宙から深海底へ→土隆一（地質雑66/252－255，図11－17，18）
・産総研：柳沢幸夫；福島県東棚倉地域に分布する・・・（地質調査研究報告）（地質雑104/296－312，図１）
・奇石博物館（理事長　酒井陽太）；鈴木博之ほか論文（英文）p. 453，Fig. 9，p. 456，図版．1－2（地質雑99/6,）；奇石博物館展示解説書（仮題）
・アーバンクボタ編集室（秋本郁夫）；中川久夫論文　３図，日本海中部沖地震災害秋田大学地質調査班　２図（地質学論集27号），香川淳ほか論文Fig. 3（第５回環境地質学論文集）；アーバンクボタ誌　no. 40　液状化・流動化特集
・久保田喜裕；久保田喜裕ほか　p. 442　１図（第92年講演要旨）；重金属による有害地層と汚染地層の境界問題（仮題）東海大学出版会
・高橋　努；高橋　努ほか（第92年講演要旨）ほか６編；八千代エンジニヤリング（株）ホームページ
・霊山町観光協会（町長大橋芳啓）；鈴木敬治ほか論文　p. 285-295（地質学論集7号）；霊山の自然（地質編）
・神戸大学図書館に対し，論集51号のデジタルデータを（永久，制限付き）貸与した．
・国立情報学研究所電子図書館サービスの拡大要請について
同研究所から，雑誌や出版物の無料公開の拡大が求められたが，審議の上，従来通りの対応とすることとした．著作権収入に関しては問題ないが，会費を払っている会員と一般人の無料閲覧との間にサービスの差を維持する必要があると判断した．著作権使用料の配分があった：2,508円（平成10～12年62円，13年2,446円）

(4) 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会か

ら，科研費審査委員候補者（１段審査委員１名，２段審査委員１名）の推薦依頼があった（〆切５月２日）．

(5) 認会計士篠原通夫氏と顧問契約を結んだ（20,000/月）．

(6) 井桁ビルの賃貸契約満了に伴い，再契約を結んだ（４月１日から２年間）．賃料変更なし．

(7) その他，催事案内，賞，助成金の公募など，会員に広報すべき案内については，随時ニュース誌，ホームページなどに掲載した（執行委員会議事録参照．次号掲載予定）．

会員関係

(1) 次の入会を承認した．

正会員　６名：野原　壮・志村玲子・中嶋雅宏・笹川忠夫・所　博之・Ko Jae-Kwon

正会員（院生割引）　５名：松橋　基・川田祐介・青山正嗣・木村治夫・長谷川　健

学生会員　１名：大橋聖和

(2) 次の退会を承認した．（賛助会員　２社，正会員　102名）

㈱日さく大阪支店，㈱水道機工，今井茂雄・今村憲子・池崎文也・印南陽子・内山正國・梅沢俊一・遠藤真哉・大久保肇・岡本　茂・沖井桂子・片山哲哉・加藤和浩・金井純子・金谷貴正・河内洋祐・紀岡秀征・菊地輝行・木村清・木村秀雄．木村方一・工藤永悦・桑原啓三・小林保彦・小屋開地稔・小藪一之・齋藤洋彦・斎藤庸・笹山岳大・佐藤輝夫・清水勇・志村玲子・高山徳二郎・滝口徹・田中元・谷口久能・谷野宮竜浩・田野倉達弘・田渕章敬・Choi Tad James・辻田圭吾・天白俊馬・友野邦彦・中村裕昭・永井勝也・永尾哲夫・新谷健・西嶋輝之・西塚知久・西野幸代・仁平雅子・信田圭三・芳賀正和・朴進午・蜂須紀夫・林　豊和・原田　真・平山勝美・許成基・堀川恵司・本間弘次・前田正男・町田秀勝・松木善徳・三津野真澄・水口公徳・宮崎研・宮武隆二郎・宮村　滋・村山一雄・森本　晃・山真典・山崎　眞・山田琢哉・山中正宏・山本隆広・夕部雅丈・横井研一・横田勇治・渡辺恭太郎・渡辺隆・渡辺史子・石川正道，呉　時国，及川鉄夫，開出尚文，今野正雄，杉本　章，瀬川忍，田口栄次，立野久美，戸谷成寿，日浦祐樹，人見美哉，安武由充，山田営三，吉岡秀佳，新　和宏，吉田公，浜本礼子，藤村孝信，中村　譲，鴨井幸彦

(3) 次の会員が逝去された．（正会員７名）

山下高徳（2002年10月19日），大久保大（11月13日），本多朔郎（12月17日），伊藤　新（2003年１月13日），大木靖衛（１月21日），鷹觜守彦（１月29日），袋瀬六松（１月30日）

(4) 次の正会員（101名，1999年～2002年までの滞納者）は，2003年１月20日をもって除籍とした．

青池　寛・青野博行・浅井明人・新井節・新井慶将・有坂春彦・安藤秀一・伊藤寛之・伊藤　渉・井上優治・猪俣陽一・岩岡洋・岩田健吾・上田仁志・内田守亮・江頭直子・大石いずみ・大塚匡・大友淳一・大野尚樹・大森総一・大脇雅直・岡部史生・岡村　晋・小田幸人・加藤一彦・加藤　昇・金森　潤・岸本千秋・木田進太郎・草野高志・小泉友美・小岩修平・小菅　康・米虫　聡・古屋克江・後藤潔・後藤真一・佐藤　隆・佐藤暢男・柴田俊彦・下村博之・新名　亨・須田裕子・高尾晶彦・高橋信也・高橋祥之・田口泰雄・竹内健二・田辺清一・谷本学・張　軍・土田邦博・角田真一・手塚茂雄・戸田文雄・中澤知哉・仲沢隆・中島秀敏・並木則行・C. J. Nicholas・西谷正史・西山昭一・橋本晃一・馬場健司・姫野　修・平塚美友紀・藤代典子・藤田勝利・藤田　望・藤野晃・船津　宏・堀　和典・堀口瑞穂・本堀順一・前島丈明・松永光一・松濤聡・松村吉教・松山朋代・丸山貴幸・水谷哲也・三ツ井誠一郎・緑川義行・三宅立雄・村瀬次男・村田昭浩・村中重仁・Moe Kyaw Thu・梁瀬洋一郎・山之内芳徳・横田佳憲・吉池高行・吉崎　正・吉津　研・寄立　徹・Rajneesh Kumar・李仁泰・渡邉慶太・渡邉守夫

(5) 会員の動静（2003年２月末現在）

	賛助会員	名誉会員	正会員(内 院生割引)	学生会員	合計
2002.11.末	42	73	4994(275)	36	5145
2003.2.末	41	73	4751(155)	22	4887
増・減	－0	0	－243(－120)	－14	－258

会員の減少が進んできていることについて，つぎのような議論があった．

・退会者の年代別を見ると中高年層が減少し，学生は80年代から見ると激減の一途をたどっている．院生会員の減少に関連しては，会費の割引申請をしていないため，実際の院生数より会員としては少ないのではないか．また，論文投稿のこと，社会に直結する学会が一般会員を引き止めることになる，などが話題となり，議論された．

・今後，雑誌の編集方針や年会のあり方などについて，研究企画委員会等で根本的に検討，議論していくことが必要であるなどの意見が出された．

・各大学の院生の入会数，各階層などがどうなっているかを確認してほしいなどの意見も出た．

会計関係

立石執行委員より以下の報告があった．

(1) 2002年決算（案）が終了し，2003年予算（案）を立てた．【議題へ】

(2) 2003年３月11日に会計監査をうけ，栗本・三本監査の承認を受けた．

(3) 斎藤林次名誉会員（2万円），牛来正夫名誉会員のご遺族（20万円）より寄付があった．

自然史学会連合

・森田利仁委員より，総会議事録，決算報告が送付され，ニュース誌2003年２月号に掲載した．

・連合として，加盟学協会に対し，１）連合HPへのエッセイ，コラムの原稿募集，２）共催シンポジウム（科研費による予算25万円）の募集：１件，募集期間2003年２月１日～３月31日

地質科学関連学協会連合　（天野委員）

・地球惑星連合の際に地質研連と共同で地学教育のシンポジウムを開催する予定でいたが，他学会がほとんど似たようなセッションを設けることがわかったので，取りやめた．ただし，静岡大会の際に地学教育委員会などと共同でトピックセッションをもうけることとし，準備中である．

２）広報委員会

立石執行委員より以下の報告があった．

(1) ニュース誌編集小委員会

ニュース誌編集状況：３月号まで発行済み．

(2) インターネット運営小委員会

HPのトップページ改訂について，３月５日，宮下委員と事務局とでコンテンツについて検討し，執行委員会に報告すると同時に現在委員会でそれを検討中．まとまり次第再見積もりの上発注の予定．改訂費用としては60～70万円前後になる見込み（2003年度予算計上済み）．

２．学術研究部会

１）行事委員会

徐委員長より以下の報告があった．

静岡大会のセッションについて29日に委員会を開催した．定番およびトピックセッションはそれぞれ24および10件前後になる予定で，４月10日までに専門部会も含めて調整を行う予定．準備状況としては，18会場（うち３つは展示用）を確保して，順調に進んでいる．また，要旨集･巡検案内書の著作権の問題の検討ややポスター賞への要望のとりまとめを今後行う．なお，行事委員の交代（秋葉文雄会員→大久保進会員（石油資源））があった．

２）専門部会連絡委員会

これから活動がはじまる．

３）国際交流委員会

特になし．

４）研究委員会

環境地質研究委員会

特になし．

ヒマラヤ地質研究委員会

特になし．

「地質学と地震」研究委員会

特になし．

南極地質研究委員会

廣井委員長より以下の報告があった．

第44次南極地域観測隊の現況

第44次南極地域観測隊に参加中の川嵜智佑（愛媛大），川野良信（佐賀大），池田剛（九州大），河上哲生（岡山大）の４名は，２月中旬をもって現地での調査を無事に終了し，現在「しらせ」にてシドニーに向かって航行中．帰国は３月28日の予定．

研究集会

・１月９日，極地研究所において「東南極大陸地殻形成に関する研究小集会－東南 極大陸氷床下の地殻の研究－」を開催し，第47，48次で計画されているドイツ・アルフレッド・ウエゲナー研究所との航空機共同観測の概要と科学目標について討議した．

・１月11－12日，山口大学において研究集会を開催し，リュツオ・ホルム岩体，ナピア岩体，シューマッハーヒルの高温～超高温変成作用についての研究発表ならびに討論を行った．また，第46次の調査計画の概要についても意見交換した．

地質環境の長期安定性に関する研究委員会

特になし．

３．編集出版部会

１）地質学雑誌編集委員会

渡部委員長より，地質学雑誌編集状況（３月号まで発行）の報告があった．

２）企画出版委員会

特になし．

３）The Island Arc連絡調整委員会

会田委員長より，今年度の申請の計画変更届けが２月６日付けで承認され，補助金520万円が確定した，との報告があった．なお，遅れていた特集号は現在予定どおり編集中である．

４．普及教育事業部会

１）学校教育委員会

佐瀬評議員より，「地学」関連学会連絡協議会を３月に開催し，教科書会社の担当者から作成過程について文部科学省とのやりとりについての話を聞いたこと，及び次回の同協議会が6月に開催される旨の報告があった．これに対して，高校，大学，合同大会などでの地学教育への取り組み方の現状についての議論がなされ，今後サイエンスキャンプやNHKの地学関連番組（「地球大紀行part 2」）などを利用した地学教育の普及が望まれるとの意見も出された．

２）生涯教育委員会

柴評議員より，箱根火山博物館が閉館となったこと，また今後SSP（Science Support Project）を考えていきたいとの報告があった．

３）地質基準委員会

新妻評議員より，以下の報告があった．

「地質学調査の基本－地質基準」の2003年９月出版を目指し，各地質体についての原稿を分担執筆するとともに，毎月開催される委員会で内容を検討している．３月17日の委員会で最終検討を終えて，編集作業に入る予定である．

４）地層名委員会

特になし．

５）地質学用語集出版委員会

新妻評議員より，以下の報告があった．

2004年９月の出版を目指し，共立出版から既に出版されている地質関係図書の索引を委員が分担し，用語の選択を行っており，３月24日に開催された委員会で検討を行った．用語には高校の教科書に載っている固有名詞も入れ，外国人にも分かるようにローマ字読みを並記する．用語数は4000語程度．

５　その他

１）その他の執行委員会報告

(1) 学会出版物からの転載・引用について

知的財産権等検討委員会（上杉陽委員長）からの報告に基づき,地質学会としての知的財産権に関する考え方を審議し，その提案と転載許可申請書の改訂を認めた．急ぐことなので，その公示をニュース誌2月号に掲載することとした．なお，この審議の過程で，地質学会としての倫理綱領を早く制定することの重要性が再認識された．

(2) 選挙監理委員会委員の決定と報告

・１名未決定の委員は坂本正徳会員（國學院大學）に依頼した．また，委員長は互選の結果坂本委員に決定した．

・選挙の広報不足を補うためニュース誌3月号で，公示の予告を掲載することとした．

(3) 02年度決算及び03年度予算を審議した．

・決算については，会費納入の減少（納入率としては減少していないが，会員の減少が進んでいるので今後の会費収入について懸念がある）が問題にされ，入会の促進を呼びかける必要性が指摘された．

・水野前事務局長の退職金は財政事情が良いので，積立金取り崩しではなく，一般会計から支払った．

・事業準備引当金を初めて計上した．

・次年度予算の点では，静岡大会の経費見積もり，普及，支部活動補助費，執行委員会旅費などについて詳しく審議した．

(4) 倫理規定策定委員会が作成した倫理綱領案（第一次案）について審議した．項目間の重複，学会と会員の区別，カバーする内容について意見がだされた．重要な内容と議論の難しさを含むので，今後は委員会の拡充を図り，また，３月の評議員会での審議を受け，会員からの意見を聞く機会（６月27日，午後の予定）を持った上で，６月の評議員会で決定するという段取りですすめることとなった．

なお，議題は「倫理綱領（一次案）」ではなく，中間報告という位置づけで「倫理綱領（3．12版）」とすることが確認された．

(5) 国立情報学研究所電子図書館サービスの利用促進，拡大要請について

同研究所から，雑誌や出版物の無料公開の拡大が求められたが，審議の上，従来通りの対応とすることとした．著作権収入に関しては問題ないが，会費を払っている会員と一般人の無料閲覧との間にサービスの差を維持する必要があると判断した．

(6) 2003年度青少年のための科学の祭典（７月24－28日　科学技術館：日本科学技術振興財団）開催に際し，神戸信和会員より同典への申し込み（日本地質学会会員として）の連絡があった．今後は学校教育委員会などでの組織的取り組みに発展させることを検討する必要性が望まれた．

２）執行委員会関係の委員会等の報告

支部長連絡会議

玉生評議員より以下の報告があった．

① 12月14日に委員会を開催して，地質災害委員会の今後の進め方を議論するとともに，「地方地質誌」の進捗状況についても意見交換を行った．

② ３月29日午前中には法人化に関係して，法人化に伴う支部体制の見直し案について議論した．

地質災害委員会

玉生委員長より，上記12月14日の支部長連絡会議の中で，地質災害委員会の今後の進め方について決めた旨の報告があった．

JABEE委員会

三宅委員長より，平成15年度からの本格審査に伴い，NEDOの助成打ち切りによる審査料の不足を補うため，資源素材学会から40万円，地質関係４学協会（地質・応用地質・地下水・全地連）の負担が40万円程度ある見込みとの報告があり，これを了承した．

技術者継続教育委員会

特になし．

Ⅱ　各種委員会報告（評議員会関係）

１．各賞選考委員会

大友委員長より，2003年３月13日現在の2003年度日本地質学会各賞推薦状況は，日本地質学会論文賞が３件，日本地質学会研究奨励賞が２件，日本地質学会表彰が１件であるとの報告があり，締め切りは３月31日であり，長短を気にせずに推薦文をもっと寄せて欲しいとの要望がなされた．

２．名誉会員推薦委員会

加藤委員長（副会長担当）より，近々委員が決まり，４月に推薦の要請，５月に会合にて候補者の決定，６月の評議員会で報告の予定であるとの報告があった．

３．科学研究費委員会【議題へ】

次年度科研費委員の選考を行う．

4．学術会議連絡委員会

各委員長より以下の報告がなされた．

1）地質学研連

第7回議事録（案）が報告（本誌別掲）

2）鉱物学研連

鉱床学専門委員会と合同の第8回議事録が報告（本誌別掲）．

3）鉱物学研連鉱床学専門委員会

鉱物学研連と合同の第8回議事録が報告された（本誌別掲）．

4）地球化学・宇宙化学研連

地球化学・宇宙化学研連議事録（第6回）はニュース誌2月号に掲載．第7回議事録（案）が報告（本誌別掲）．

5）海洋科学研連

第8回議事録が報告（本誌別掲）．

6）国際学術協力事業研連

特になし．

7）古生物学研連

第7回研連議事録はニュース誌2月号に掲載．第8回議事録が報告（本誌別掲）．

8）地質科学総合研連

第7回議事録（案）が報告（本誌別掲）

9）IGCP専門委員会

日本IGCP活動報告2002年が発行された．

5．地学教育委員会

特になし．

6．女性地球科学者の未来を考える委員会

田崎委員長から以下の報告があった．委員会メンバーを対象に保育施設についてアンケートを実施した．現在国公立大学62校に保育施設がある．詳細はニュース誌3月号に掲載．

7．研究企画委員会

特になし．

8．法人化準備委員会

立石執行委員から以下の報告があった．1月27日，3月14日に委員会を開催．そのほか移行運営WG（2月26日），募金WGの会合が開かれた．3月14日には平会長が文科省と交渉した結果が報告された．公益法人改革に関して，大枠が決まるのは現状では見通しが立たない．学会としては状況を見守りつつ，それと並行して足腰の強い学会活動を作り上げる必要性が指摘された．

9．倫理規定策定委員会【議題へ】

3月12日に委員会を開催し，倫理綱領の第一次案がまとまった．29日の評議員会を経てニュース誌（5月号）で会員にも公表し，それぞれ意見聴取のうえ，最終案を6月の評議員会までに作成する予定．

10．知的財産権等検討委員会

渡部委員より以下の報告があった．知的財産権は，講演要旨･巡検案内書の作成にも適用される．これを静岡大会から適用できるか否かが問題となるが，次回4月10日の会合結果を踏まえて執行委員会の判断に一任することとしたい．

11．オンライン化検討委員会

鈴木評議員より以下の報告があった．委員に入野智久氏（北大大学院地球環境科学研究科）を追加した．昨年おこなったアンケートのまとめをニュース誌2月号に掲載した．このアンケート結果と本学会の状況を踏まえて本委員会の活動方針として，短期的目標としてはメールアドレスを持つ会員へのニュース配信システム（メールマガジン）の保有，短中期的目標として年会運営関係のオンライン化･講演要旨の電子化，中期的目標としてWebデータベースグラフィックインターフェースの検討，そして中長期目標として地質学雑誌の電子化，電子出版に関する基礎調査の継続を，提案したい．これに対して，基本方針に賛成だが，ニュース配信システムの中での項目についてはニュース誌とのすみ分けを考慮して欲しいとの要望が出された．

Ⅲ　その他の報告

・今後の評議員会の日時・会場について
2003年度第4回　2003年6月28日（土）13：00～　北とぴあ（決定済み）
同　　第5回　2003年9月18日（木）13：00～　静岡大学（決定済み）
2004年度第1回　2003年9月19日（金）静岡大学（決定済み）

・伊藤，廣井両氏より千葉大会概要について説明があり（実行委員長：伊勢崎修弘会員，準備委員長：大原　隆会員），支部中心の開催ということで，該当の諸機関の会員に呼びかけ，実行委員会の準備会を5月9日に行うことが報告された．

議　題

1．学術会議会員候補者と推薦人の選出について

公文執行委員長より以下の事後承認を求める報告があり，承認された．会員，評議員あるいは執行委員会から推薦された候補者から，評議員による郵送通信投票により選出した．結果は，下記のとおりであった（すでにメールにより連絡済み）．会員候補者については信任ならびに第1位得票の方を候補者とした．推薦人は定員の数に応じて上位から，推薦予備人は次点以下の方にたいし順次確認を取り，候補者とした

選挙結果は下記のとおり，候補者として3月13日，学術会議会員推薦管理会に送付した．

＜投票数＞
評議員　47名　投票　31名
投票拒否　1名

＜会員候補者＞
1．地質学研連（1名）　小松正幸
2．地質科学総合（1名）　岩松　暉
3．鉱物学研連（1名）　田崎和江

＜推薦人および推薦人予備者＞
1．地質学研連（2名）
推薦人　天野一男・八尾　昭，推薦人予備者　宮下純夫
2．地質科学総合研連（1名）
推薦人　公文富士夫，推薦人予備者　荒戸裕之
3．鉱物学研連（1名）
推薦人　石渡　明，推薦人予備者　平島崇男

2．平成16年度科研費審査委員候補者の決定

三宅委員長による説明の後，投票が行われた結果，以下の各細目の候補者および予備候補者が選出され，順位をつけて推薦することとした．（　）内は候補者数．

地球科学2段（1名），地質1段（2名），層位古生物1段（2名），地球惑星科学2段（1名），地球宇宙化学1段（1），環境学2段（1名），環境影響評価環境政策（1名），環境動態解析（1名），岩石・鉱物・鉱床1段（1名）

3．2002年度決算（案）の承認と2003年度予算（案）の承認（本誌別掲）

立石会計担当委員および公文執行委員長により題記内容についての説明報告があり，承認された．

予算案について，とくに役員旅費の予算化については，検討してもらいたい旨の意見が出された．

4．法人化における学会活動と組織運営について

立石執行委員より，行革の最終まとめが出ていない現状ではあるが，法人化準備委員会移行検討グループが3月4日にとりまとめた定款（案）と現行会則との比較資料の提示がなされ，支部と本会との関係，代議員や理事会と現行組織との関係，社団法人とNPO法人との違いなどについて意見の交換が行われた．今後NPOの件も含め検討を進め，次回6月の評議員会で定款案等についても議論することとなった．なお，6月の評議員会の前日27日には公開討論会（於　北とぴあ）が開催される予定．

5．地質学会倫理綱領（3.12版）について

伊藤担当執行委員より，倫理規定策定委員会が3月12日にまとめた綱領（案）についての提示がなされ，足立委員から倫理綱領案（3.12版）の説明があった．その内容や適用範囲，著作権との関係，会員の行動規範となるのか否か等々の意見交換が行われた．最後に伊藤委員から今後の予定として，今回の議論を基に4月中に第1次案を作成しニュース誌5月号で会員に広報し，6月27日の公開討論会（於　北とぴあ）での議論を踏まえて第2次案を作成し，28日の評議員会を経て，7月号のニュース誌で会員に最終案を広報する．また，委員会の拡充（10名体制にすること）などが提案され，了承された．さらに意見があれば同委員会の松本委員長まで提出して欲しいとの要望が出された．

6．その他

特になし．

2002年度（平成14年度） 決算（案）

2002年(平成14年) 1月1日～12月31日　　（単位：円）

収入の部	02年度予算	02年度決算	差　額	02年度決算案の説明
1. 会費収入	54,200,000	55,295,127	-1,095,127	
賛助会員	2,300,000	2,350,000	-50,000	5社退会で13口減
正会員	49,000,000	50,412,127	-1,412,127	昨年度末にて約6%減
院生割引正会員	2,600,000	2,348,000	252,000	院生割引申請10%程度減の減
学生会員	300,000	185,000	115,000	会員数前年と変わらず
2. 事業収入	16,600,000	16,104,141	495,859	
論集収入	1,000,000	662,370	337,630	新刊なしで相乗効果なし
雑誌販売収入	5,000,000	4,798,420	201,580	購読数減少傾向
雑誌印刷負担金収入	2,300,000	1,799,816	500,184	超過・カラーページ減
別刷収入	1,800,000	1,433,540	366,460	部数上限設定のため、伸びず
広告料収入	600,000	1,170,000	-570,000	予想した減少なし、名簿広告料含まず.
年会開催費	5,800,000	5,783,695	16,305	
参加登録料	2,700,000	3,698,500	-998,500	参加者約1000人
発表登録料	0	0	0	導入は継続検討
予稿集売上	300,000	496,600	-196,600	約100冊販売
補助金・寄付金	2,500,000	1,437,640	1,062,360	企業分37万円，県補助金約100万円
展示収入	250,000	102,205	147,795	販売手数料，ブース等
雑収入	50,000	48,750	1,250	保育料個人負担分
年会普及事業開催費	0	0	0	
文部省補助金収入	0	0	0	02年未申請
その他寄付金	0	0	0	
年会地質情報展開催費	0	0	0	項目新設
展示・販売手数料	0	0	0	
その他寄付金	0	0	0	
普及資料等販売収入	100,000	456,300	-356,300	鉱物下敷き再販により収入増
3. 補助金等収入	3,100,000	6,355,000	-3,255,000	
文部省刊行補助金収入	3,100,000	5,200,000	-2,100,000	アイランドアーク刊行補助費
国際交流補助金	0	0	0	
その他助成金	0	1,155,000	-1,155,000	明日を拓く印刷費として科研費使用
4. その他	2,312,171	6,207,447	-3,895,276	
受取利息	10,000	5,080	4,920	
引当金受取利息	0	222,003	-222,003	積立継続の場合は引当金に追加で相殺
雑収入	672,171	1,665,979	-993,808	BS社ﾛｲﾔﾘﾃｨ含む
アイランドアーク預り金	1,630,000	1,496,000	134,000	収支相殺，OL購読で減少，昨年末入金分で予算クリア
寄付金	0	2,818,385	-2,818,385	寄付目的に応じ引当金に分配し相殺
5. 基本財産受け入れ収入	0	0	0	
6. 敷金保証金解約収入	0	0	0	
7. 特定引当金取崩収入	4,438,062	4,438,062	0	
事業準備金取崩	0	0	0	
特別引当（刊行補助）取崩	3,100,062	3,100,062	0	アイランドアーク科研費BS社支払で相殺
臨時引当取崩	338,000	338,000	0	科研費文科省へ返金で相殺
名簿刊行費取崩	1,000,000	1,000,000	0	刊行費用充当
事務局移転費取崩	0	0	0	
退職金手当取崩	0	0	0	
総目録刊行費取崩	0	0	0	
普及書出版費取崩	0	0	0	
年会開催補助費取崩	0	0	0	
研究奨励費取崩	0	0	0	
当期収入合計	80,650,233	88,399,777	-7,749,544	
前期繰越収支差額	23,849,767	23,849,767	0	
収入合計	104,500,000	112,249,544	-7,749,544	

支出の部	02年度予算額	02年度決算額	予算との差額	02年決算案の説明
1. 事業費	42,212,460	41,850,154	362,306	
(1)集会費	7,418,000	6,369,712	1,048,288	
総会開催費	200,000	58,878	141,122	
年会開催費	5,800,000	5,623,495	176,505	収入と相殺
会場費・会場設営費	450,000	286,235	163,765	会場借り上げ費
機器賃借料	1,250,000	1,181,434	68,566	ポスター展示パネル等賃借料
資料印刷費	1,830,000	1,434,825	395,175	演旨1500部印刷
アルバイト人件費	1,350,000	1,948,000	-598,000	延べ人数約250人分
文具費・郵送費	270,000	159,646	110,354	演旨送料ほか
旅費・交通費	500,000	492,700	7,300	事務局出張旅費，準備委員旅費など.
雑支出	150,000	120,655	29,345	保育所補助費等
年会普及事業開催費	408,000	338,000	70,000	新設，会計上独立した行事とする.
会場費・会場設営費	0	0	0	
資料・ポスター印刷費	70,000	0	70,000	情報展ポスターに便乗印刷，支出なし
講師謝金	0	0	0	会員のため支払いなし
旅費・交通費	0	0	0	会員のため支払いなし
雑支出	338,000	338,000	0	01年普及講演補助残金文科省に返還，引当金で相殺
年会地質情報展開催費	450,000	208,509	241,491	会場費等は支出なし

会場費・会場設営費	200,000	0	200,000	
資料・ポスター印刷費	200,000	208,509	−8,509	ポスター，チラシ印刷費
雑支出	50,000	0	50,000	
諸集会費	150,000	35,160	114,840	
執行委員旅費	0	0	0	今後も導入検討
支部長会議旅費	0	0	0	今後も導入検討
会計監査委員旅費	50,000	35,160	14,840	新潟総会旅費1名
その他集会費	100,000	0	100,000	
事業計画関連費	400,000	105,670	294,330	JABEE会費10万円他
雑費	10,000	0	10,000	
(2)出版費	**33,900,000**	**34,640,927**	−740,927	
アイランドアークオンライン出版費	4,700,000	4,700,000	0	アイランドアークのOL費用をBS社に支払い.
アイランドアーク編集費	300,000	734,346	−434,346	編集事務局経費
地質学雑誌雑誌印刷費	18,000,000	17,717,952	282,048	前年よりページ数微増，別刷り代減
地質学雑誌編集費	600,000	643,174	−43,174	
雑誌・ニュース誌送本費	8,300,000	8,180,807	119,193	02年名簿送料，約78万円含む
論集印刷費	0	0	0	
名簿刊行費	2,000,000	1,257,648	742,352	データ編集印刷を1本化して経費減
総目録刊行費	0	0	0	
リーフレット・普及書刊行費	0	1,407,000	−1,407,000	明日を拓く印刷費科研費で相殺，鉱物下敷き売上げ等で相殺.
(3)研究奨励費	**400,000**	**394,250**	5,750	賞金，メダル研磨，賞状特注カバー等.
(4)補助費	**394,460**	**364,265**	30,195	
支部補助費	194,460	194,460	0	01年支部再編に係る補助，四国支部
研究委員会・専門部会費	0	169,805	−169,805	アンケート実施費用
普及講演会補助費	200,000	0	200,000	普及行事は年会費用と込み.
(5)学界交流費	**100,000**	**81,000**	19,000	
国際交流助成費	0	0	0	
学界交流助成費	100,000	81,000	19,000	自然史連合，学会共・協賛負担金，ほか
2. 管理費	**31,637,540**	**31,455,727**	181,813	
人件費	20,000,000	19,153,371	846,629	4月より1名採用，9月事務局長退職、12月より公務員給与に準じベースダウン
退職金	0	1,200,000	−1,200,000	水野分一般費からの支出，退職引当金は取り崩しなし
通信費	1,100,000	988,448	111,552	メール通信で郵送費節減
役員選挙費	750,000	686,186	63,814	投票用紙および投票郵送費
旅費・交通費	10,000	8,700	1,300	
会議費	600,000	607,804	−7,804	評議員会年間5回会場費ほか
事務所賃借料	4,940,000	4,975,728	−35,728	支払い実費414644×12
光熱費	700,000	646,432	53,568	
什器備品賃借料	1,750,000	1,218,636	531,364	リースアップ物件継続使用，事務機器借替えによるリース料アップなし
消耗品費	1,450,000	1,537,041	−87,041	雑誌発送封筒、コピー紙等
雑費	337,540	433,381	−95,841	
3. その他	**1,630,000**	**1,630,000**	0	
アイランドアーク預り金支出	1,630,000	1,630,000	0	収入と相殺、OL購読により数減少
4. 基本財産繰入支出	**0**	**896,186**	−896,186	寄付金繰入および引当金利子繰入
5. その他の固定資産取得支出	**0**	**0**	0	
6. 特定引当金繰入支出	**6,540,000**	**25,584,203**	−19,044,203	
刊行補助特別引当	3,100,000	5,200,000	−2,100,000	アイランドアーク、年明支払いにつき引当
名簿刊行費繰入	0	0	0	刊行年のため積み立なし
事務局移転費繰入	0	4,488	−4,488	引当金利子繰り入れ
退職金手当内部繰入	2,700,000	2,908,189	−208,189	積立金+引当金利子
退職金外部積立繰入	240,000	240,000	0	中小企業退職金共済，政府補助1/3+
総目録刊行費繰入	200,000	205,936	−5,936	積立金+引当金利子
普及書出版費繰入	0	225,590	−225,590	寄付金繰り入れ
年会開催補助費繰入	0	0	0	
研究奨励費繰入	300,000	1,800,000	−1,500,000	寄付金繰入,国際賞限定
事業準備金繰入	0	15,000,000	−15,000,000	次年度準備金
7. 予備費	**1,000,000**	**0**	1,000,000	
当期支出合計	**83,020,000**	**101,416,270**	−18,396,270	
当期収支差額	**−2,369,767**	**−13,016,493**	10,646,726	
次期繰越金	**21,480,000**	**10,833,274**	10,646,726	

02年決算　単年度収支	
収入	**112,249,544**
前年度からの繰越	23,849,767
単年度収入	88,399,777
取崩収入	4,438,062
実質単年度収入	83,961,715
支出	**112,249,544**
単年度支出	101,416,270
繰入支出	25,584,203
実質単年度支出	75,832,067
次年度への繰越	10,833,274
単年度収支(繰越金収支)	**−13,016,493**
引当金収支	**21,146,141**
実質単年度収支	**8,129,648**

2002年度（平成14年度） 財産目録

2002年12月31日　現在　　（単位　円）

基金	**2,798,198**
前年度末	1,902,012
2002年度引当額	893,250
預金利息繰り入れ額	2,936
事務所保証金	**2,000,000**
運用財産	**10,833,274**
銀行預金	2,087,584
郵便貯金	7,588,168
現金	1,157,522
財産総計	**15,631,472**

次年引当準備金	**20,200,000**
事業準備金	15,000,000
刊行補助特別引当金	5,200,000

引当準備金総計	**26,411,221**
退職手当引当準備金	**18,795,209**
前年度末	15,887,020
2002年度積立額	2,700,001
預金利息繰入額	208,188
名簿刊行費引当準備金	**-**
前年度末	1,000,000
預金利息繰入額	320
名簿刊行費繰入支出額	-1,000,320
2002年度積立額	-
年会引当準備金	**1,200,000**
前年度末	1,200,000
2002年度積立額	-
普及出版引当準備金	**847,294**
前年度末	621,704
2002年度積立額	225,135
預金利息繰入額	455
総目録刊行費引当準備金	**2,208,227**
前年度末	2,002,291
2002年度積立額	200,000
預金利息繰入額	5,936
研究奨励金引当準備金	**2,110,000**
前年度末	310,000
2002年度積立額	1,800,000
事務所移転引当準備金	**1,250,491**
前年度末	1,246,003
2002年度積立額	-
預金利息繰入額	4,488
退職手当引当金外部積立金	**660,000**
前年度末	300,000
2002年度中退共掛金	240,000
2002年度中退共掛金助成	120,000

2002年度寄付者及び寄付内訳（敬称略）

基金	893,250
明日を拓く･･･編集委員会*	763,250
斎藤林次名誉会員	30,000
徳永重元名誉会員	100,000
普及出版費	225,135
地質基準編集委員会**	144,384
層序ガイド編集委員会***	80,751
研究奨励費	1,500,000
渡辺衣恵（故渡辺暉夫会員夫人）	1,500,000
事務局整備費（一般会計繰越）	**200,000**
水野篤行名誉会員	200,000

*稲崎富士，井内美郎，岩松　暉，大矢　暁，釜井俊孝，清水恵助，徳岡隆夫，楡井　久，湯佐泰久

**足立勝治，天野一男，岩松　暉，上砂正一，宇田進一，坂　幸恭，酒井　彰，酒井隆太郎，滝田良基，新妻信明，水野篤行，籾倉克幹，山元孝広

***天野一男，新井房夫，小笠原憲四郎，清水恵助，熊井久雄，高山俊明，新妻信明，楡井　久，能條　歩，平野弘道，水野篤行，八尾　昭，柳沢幸夫

2003年3月11日

日本地質学会
会長　平　朝彦　殿

日本地質学会会計監査
栗本　史雄
三本健四郎

2002年度（平成14年度）会計監査報告

2002年度（平成14年度）の決算報告及び財産目録，並びにそれらに関連した帳簿，伝票，預金通帳などを監査した結果，これらはすべて正確であり，かつ適正に会計処理されたものであることを認めます．

以上

2003年度(平成15年度)　予算(案)

2003年(平成15年) 1月1日～12月31日　(単位：円)

収入の部	03年度予算	02年度予算	増　減	03年度予算案
1. 会費収入	54,890,000	54,200,000	690,000	
賛助会員	2,000,000	2,300,000	-300,000	景気低迷による脱会を考慮
正会員	50,400,000	49,000,000	1,400,000	前年実績
院生割引正会員	2,300,000	2,600,000	-300,000	前年実績
学生会員	190,000	300,000	-110,000	前年実績
2. 事業収入	18,120,000	16,600,000	1,520,000	
論集収入	500,000	1,000,000	-500,000	新規なし
雑誌販売収入	4,900,000	5,000,000	-100,000	前年実績
雑誌印刷負担金収入	1,700,000	2,300,000	-600,000	前年実績
別刷収入	1,400,000	1,800,000	-400,000	前年実績
広告料収入	1,750,000	600,000	1,150,000	02年名簿広告約66万円含む
年会開催費	6,650,000	5,800,000	850,000	支出と相殺　内訳は下記
参加登録料	4,750,000	2,700,000	2,050,000	約950人@5000
発表登録料	0	0	0	導入は継続検討
予稿集売上	450,000	300,000	150,000	約100部
補助金・寄付金	1,300,000	2,500,000	-1,200,000	法人寄付等は募らない，県と市
展示収入	100,000	250,000	-150,000	前年実績
雑収入	50,000	50,000	0	前年実績
年会普及事業開催費	820,000	0	820,000	新設，これまで年会開催費で計上
文部省補助金収入	820,000	0	820,000	03年申請額
その他寄付金	0	0	0	
年会地質情報展開催費	0	0	0	
展示・販売手数料	0	0	0	
その他寄付金	0	0	0	
普及資料等販売収入	400,000	100,000	300,000	新規予定見込み
3. 補助金等収入	5,200,000	3,100,000	2,100,000	
文部省刊行補助金収入	5,200,000	3,100,000	2,100,000	前年実績
国際交流助成金	0	0	0	
その他助成金	0	0	0	
4. その他	3,156,726	2,312,171	844,555	
受取利息	5,000	10,000	-5,000	前年実績
引当金受取利息	200,000	0	200,000	前年実績
雑収入	701,726	672,171	29,555	前年実績
アイランドアーク関連収入	2,250,000	1,630,000	620,000	アイランドアークロイヤルティ+購読料
寄付金	0	0	0	目的に応じ引当金に分配し相殺
5. 基本財産受け入れ収入	0	0	0	
6. 敷金保証金解約収入	0	0	0	
7. 特定引当金取崩収入	20,200,000	4,438,062	15,761,938	
事業準備金取崩	15,000,000	0	15,000,000	今年度運営資金
特別引当(刊行補助)取崩	5,200,000	3,100,062	2,099,938	前年実績
臨時引当取崩	0	338,000	-338,000	今年なし
名簿刊行費取崩	0	1,000,000	-1,000,000	今年なし
事務局移転費取崩	0	0	0	
退職金手当取崩	0	0	0	
総目録刊行費取崩	0	0	0	
普及書出版費取崩	0	0	0	
年会開催補助費取崩	0	0	0	
研究奨励費取崩	0	0	0	
当期収入合計	101,566,726	80,650,233	20,916,493	
前期繰越差額	10,833,274	23,849,767	-13,016,493	
収入合計	112,400,000	104,500,000	7,900,000	

支出の部	03年度予算	02年度予算	増　減	2003年度予算案・説明
1. 事業費	45,190,000	42,212,460	2,977,540	
(1)集会費	10,340,000	7,418,000	2,922,000	
総会開催費	400,000	200,000	200,000	総会開催費(事務局出張費含む)
年会開催費	6,650,000	5,800,000	850,000	収入と相殺
会場費・会場設営費	3,500,000	450,000	3,050,000	生協委託費含む(機器賃借込み)
機器賃借料	0	1,250,000	-1,250,000	会場設営に込み
資料印刷費	1,900,000	1,830,000	70,000	演旨，見学旅行案内書印刷費
アルバイト人件費	300,000	1,350,000	-1,050,000	会場係院生
文具費・郵送費	300,000	270,000	30,000	演旨送料ほか
旅費・交通費	500,000	500,000	0	準備委委員本部への出張旅費，見学旅行関係等
雑支出	150,000	150,000	0	前年予算どおり
年会普及事業開催費	1,020,000	408,000	612,000	文科省へ補助金申請通れば相殺
会場費・会場設営費	110,000	0	110,000	会場費、機器代
資料・ポスター印刷費	460,000	70,000	390,000	パンフレット，ポスター，チラシなど
講師謝金	0	0	0	
旅費・交通費	0	0	0	
雑支出	450,000	338,000	112,000	通信費，消耗品費+学校教育関係
年会地質情報展開催費	210,000	450,000	-240,000	
会場費・会場設営費	0	200,000	-200,000	

資料・ポスター印刷費	200,000	200,000	0	前年実績
雑支出	10,000	50,000	-40,000	
諸集会費	650,000	150,000	500,000	
執行委員旅費	300,000	0	300,000	新規，実費の極一部補助，全員で3万/月見当，
支部長会議旅費	200,000	0	200,000	1回分/年，旅費のみ計上
会計監査委員旅費	50,000	50,000	0	前年実績
その他集会費	100,000	100,000	0	
事業計画関連費	1,400,000	400,000	1,000,000	JABEE本格審査のため予算増額，HPﾘﾆｭｰｱﾙ費用
雑費	10,000	10,000	0	
(2)出版費	33,400,000	33,900,000	-500,000	
ｱｲﾗﾝﾄﾞｱｰｸｵﾝﾗｲﾝ出版費	4,700,000	4,700,000	0	ｱｲﾗﾝﾄﾞｱｰｸのOL整備ﾌﾞﾗｯｸｳｴﾙ社に支払い(契約2/3回)
ｱｲﾗﾝﾄﾞｱｰｸ編集・事務費	2,250,000	300,000	1,950,000	編集費75万＋預かり150万円
地質学雑誌雑誌印刷費	18,000,000	18,000,000	0	印刷会社変更で1割程度減の予定，ただしページ数アップを予定
地質学雑誌編集費	650,000	600,000	50,000	前年実績
雑誌・ﾆｭｰｽ誌送本費	7,500,000	8,300,000	-800,000	名簿送料なしで減
論集印刷費	0	0	0	刊行計画なし，あれば予備費から
名簿刊行費	0	2,000,000	-2,000,000	
総目録刊行費	0	0	0	
ﾘｰﾌﾚｯﾄ・普及書刊行費	300,000	0	300,000	計画なし　あれば予備費で対応
(3)研究奨励費	400,000	400,000	0	前年実績
(4)補助費	950,000	394,460	555,540	
支部補助費	350,000	194,460	155,540	法人化に関し支部運営検討，整理のため
研究委員会・専門部会費	400,000	0	400,000	積極的な活動促進のため予算化
普及講演会補助費	200,000	200,000	0	積極的な活動促進のため予算化
(5)学界交流費	100,000	100,000	0	
国際交流助成費	0	0	0	ここ数年なし．あれば収入と相殺
学界交流助成費	100,000	100,000	0	前年実績
2．管理費	31,198,000	31,637,540	-439,540	
人件費	19,300,000	20,000,000	-700,000	前年実績
退職金	0	0	0	
通信費	1,100,000	1,100,000	0	前年実績
役員選挙費	700,000	750,000	-50,000	前年実績
旅費・交通費	10,000	10,000	0	前年実績
会議費	600,000	600,000	0	前年実績
事務所賃借料	5,300,000	4,940,000	360,000	支払い実費+更新料27万円含む
光熱費	700,000	700,000	0	前年実績
什器備品賃借料	1,500,000	1,750,000	-250,000	前年実績+
消耗品費	1,600,000	1,450,000	150,000	前年実績
雑費	388,000	337,540	50,460	
3．その他	0	1,630,000	-1,630,000	
アイランドアーク預り金支出	0	1,630,000	-1,630,000	今年は別項目
4．基本財産繰入支出	201,802	0	201,802	寄付あれば収支相殺
5．その他固定資産取得支出	0	0	0	
6．特定引当金繰入支出	23,952,215	6,540,000	17,412,215	
事業準備金繰入	15,000,000	0	15,000,000	前受け会費相当額程度
刊行補助特別引当	5,200,000	3,100,000	2,100,000	前年度実績
名簿刊行費繰入	1,000,000	0	1,000,000	04年刊行のため引き当て
事務局移転費繰入	9,509	0	9,509	
退職金手当内部繰入	1,900,000	2,700,000	-800,000	可能な限り増額の趣旨変わらず
退職金外部積立繰入	340,000	240,000	100,000	中小企業退職金共済制度　3万円×12ヶ月，政府補助2月まで1万円
総目録刊行費繰入	200,000	200,000	0	前年どおり
普及書出版費繰入	2,706	0	2,706	寄付があれば収支相殺
年会開催補助費繰入	0	0	0	年会で残余金が出た時は繰入れ
研究奨励費繰入	300,000	300,000	0	前年どおり
7．予備費	1,000,000	1,000,000	0	前年どおり
当期支出合計	101,542,017	83,020,000	18,522,017	
次期繰越差額	10,857,983	21,480,000	-10,622,017	
支出合計	112,400,000	104,500,000	7,900,000	

03年予算　単年度収支

収入	112,400,000
前年度からの繰越	10,833,274
単年度収入	101,566,726
取崩収入	20,200,000
実質単年度収入	81,366,726
支出	112,400,000
単年度支出	101,542,017
繰入支出	23,952,215
実質単年度支出	77,589,802
次年度への繰越	10,857,983
単年度収支(繰越金収支)	24,709
引当金収支	3,752,215
実質単年度収支	3,776,924

CALENDAR

2003.6～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

6月　June

☆日本地質学会中部支部年会
6月14日(土)～15日(日)
総会・シンポジウム・巡検
場所：岐阜大学柳戸キャンパス
問い合わせ：中部支部事務局　竹内　誠
TEL：052－789－2525
E-mail:takeuchi@eps.nagoya-u.ac.jp
http://www.geosociety.jp/shibu/chubu.html

○地質学史懇話会　例会
6月14日(土) 13：00－17：00
北とぴあ（東京都北区王子）
JR京浜東北線王子駅徒歩2分
内容：講演3題
沓掛俊夫：占い杖と錫杖
大森昌衛：小沢儀明の生涯と業績
岡田博有：堆積学の中に見る日本

○第21回化石研究会総会・学術討論会
6月14日(土)～15日(日)
会場：金沢大学理学部・講義棟
特集「バイオミネラリゼーションとバイオレメディエーション」
特別講演：四ケ浦弘氏「温泉とトウフの環境学」，中道俊久氏「九谷焼を科学する」，後藤道治氏「福井県勝山市の恐竜化石の調査と研究について」
連絡先：京都大学大学院理学研究科地質鉱物学教室　神谷英利（運営委員長）
FAX：075-753-4189
E-mail：kamiya@kueps.kyoto-u.ac.jp

○資源地質学会年会
6月18日(水)～20日(金)
会場：東京大学山上会館
18日：総会，シンポジウム「資源地質学の新しい展開―環境問題へのアプローチ」
19・20日：個人講演会，ポスター発表
http://www.kt.rim.or.jp/~srg/

○石油技術協会第68回定時総会，創立70周年記念行事
6月23日(月)～26日(木)
会場：経団連会館　11階国際会議場
http://www.japt.org/

○日本古生物学会2003年年会・総会
6月27日(金)～29日(日)
会場：静岡大学理学部
シンポジウム「生物多様性を古生物学から考える」
http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp/palaeont/

○日本情報地質学会
6月26日(木)～28日(土)
総会・講演会・巡検（Geoinforum2003）
場所：室蘭工業大学
office@jsgi.org
http://www.jsgi.org/

7月　July

○地球地図フォーラム2003in 沖縄
7月12日(土)～15日(火)
場所　沖縄コンベンションセンター（沖縄県宜野湾市）
主催　国土交通省国土地理院/ISCGM
http://www.jscgm.org

○2003年度「青少年のための科学の祭典」全国大会
7月24日(木)～28日(月)（予定）
場所：科学技術館　一階催事場（千代田区北の丸公園）
http://ppd.jsf.or.jp/shinko/pro/ysf/

8月　August

○平成15年度全国地学教育研究大会・日本地学教育学会第57回全国大会
8月1日(金)～8月4日(月)
会場：上越教育大学講義棟
http://www.juen.ac.jp/gakkai/geo_joetsu/

○地学団体研究会第57回総会
8月8日(金)～10日(日)
会場：新潟大学五十嵐キャンパス
http://wwwsoc.nii.ac.jp/agcj/index.html

○（社）日本地すべり学会第42回研究発表会
8月20日(火)～21日(水)
主会場　国際会議場大手町フォーラム(富山市)
http：//japan.landslide-soc.org/index.html

○第6回テチス浅海域に関する国際シンポジウム
8月25日（月）～29日（金）
開催地：ハンガリー、ブダペスト市、ハンガリー科学アカデミー
http://pangea.elte.hu/paleo/tethys/circ2.htm

○日本第四紀学会2003年度大阪大会
8月29日(金)～31日(日)
場所：大阪市立自然史博物館
http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/QR2home.htm

9月　September

○第5回ハットンシンポジウム
9月2日(火)～6日(土)
会場：愛知大学（豊橋市町畑町1-1）
http://www.gsj.jp/Info/event/hutton/
(official Web)
http://www.bunbun.ne.jp/~hutton/index.html（Japanese）

○第13回Goldschmidt国際会議
9月7日(日)～12日(金)
会場：岡山県倉敷市
http://www.ics-inc.so.jp/gold2003/

○2003地球環境保護　土壌・地下水浄化技術展
9月10日(水)～12日(金)
場所　有明・東京ビックサイト

☆日本地質学会第110年年会・総会（静岡大会）
9月19日(金)～21日(日)
会場：静岡大学
http://www.geosociety.jp

○日本海洋学会秋季大会
9月23日(火)～27日(土)
場所　長崎大学
http://wwwsoc.nii.ac.jp/kaiyo/

○平成15年度日本土木学会全国大会
9月24日(水)～26日(金)
場所　徳島大学（常三島キャンパス）
http://www.jsce.or.jp/committee/zenkoku/index.html

○第47回粘土科学討論会
9月24日(水)～26日(金)
会場：広島大学大学院理学研究科　講義棟
http://wwwsoc.nii.ac.jp/cssj2/

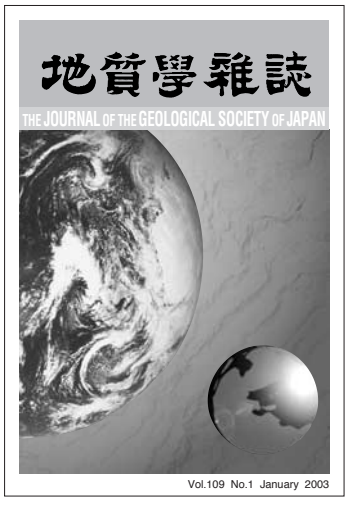
○第6回国際鉱山ヒストリー会議（赤平大会）
9月26日(金)～29(月)
場所　北海道赤平市
http://www.imch2003.com

10月　October

○日本地震学会秋季大会
10月6日(月)～8日(水)
場所　京都国際会館
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj/ssjinfo/ssjinfo.html

○日本火山学会秋季大会
10月11日(土)～13日(月)
場所　九州大学箱崎キャンパス
野外討論会は：松浦玄武岩類（13日～14日）
http://hakone.eri.u-tokyo.ac.jp/kazan/jishome/VSJNews.html

○日本応用地質学会平成15年度研究発表会
10月16日(木)～17日(金)
主会場　札幌市教育文化会館
http：//wwwsoc.nii.ac.jp/jseg/index.html



地質学雑誌への投稿の手引き

ニュース誌vol.6,No.1（2003年1月）に掲載いたしました，「地質学雑誌への投稿の手引き」において，「古生物記載法」に誤りがありましたので，ここに訂正氏，再度掲載をいたします．（地質学雑誌編集委員会）

＜地質学雑誌における古生物記載法＞

1．属名の省略

◆属名は文頭および「sp.」と共に用いられる場合では省略しない．

◆属名ならびに亜属名は大見出しの中で一度省略しない形で用いた後，かつ，他の名称と混乱が生じない場合には省略する事ができる．

◆「cf.」「aff.」などが付く種名を用いる場合はRotalipora cf. cushmani または，Rotalipora sp. cf. R. cushmaniのように用い，投稿する論文内で一方に統一する．前者の場合の属名の省略に関しては，「cf.」「aff.」などが付かない種名を用いる場合に準ずる．後者の用法の場合には「cf.」後の属名だけを省略する事ができる．

2．新種について

◆新しいタクサ（新種，新属など）については，「new species」「new genus」という用語は，Systematic descriptionの中の見出し中にのみフルスペルで用いる．

◆本文のその他の箇所では省略形である「n. sp.」「n. gen.」を用いる．

3．Systematic description，Taxonomic noteおよびシノニムリストについて

◆Systematic descriptionは本文中に入れ，Conclusionなどの後，Acknowledgmentsの前に置く．形式は以下の定める通り．

◆Taxonomic noteは本文中に入れる場合はSystematic descriptionと同じ位置にいれる．本文に入れずにappendixとして文献リストの後に付けても良い．

◆Taxonomic noteの形式は本文中に入れる場合は以下に示すSystematic descriptionに準ずるものとする．

◆Systematic descriptionやTaxonomic noteを付けず，シノニムリストのみを付す場合はappendixとして文献リストの後に付ける．

4．古生物Systematic descriptionの書き方

◆見出しとなる属・種名および提唱者名等にはスモールキャピタルは用いない．

◆前記載との間に空行一行を入れる．

◆分類学的な位置付けを示す項目はセンター揃えとする．どの階層から書くかは著者が判断できる．

◆図面番号は「Figure(s)」によって示す．図内番号は1から始める独立した番号を与え，1-1, 1-2などと表記する．同一個体については，1-1a, 1-1b等と標記しても良い．

◆シノニムリストは種名（原記載著者名を必ず含む），シノニムとした標本記載論文の著者名，年代，p. を冠するページ数，pl.（pls.）を冠するプレート番号，fig.（figs.）を冠する図番号の順に記し，コンマで区切るものとする．ただし，種名と次の項目の間だけはピリオドで区切る．同じ種名で記載した複数の論文を並記する場合はセミコロンで区切り，続けて同様に記す．改行する場合は行頭を一段落とす．原記載の場合は著者名を重複させず種名の次に年代を置き，全てコンマで区切る．なお，膨大なシノニムリストを必要とする場合は，いたずらに無駄なスペースを取らないよう配慮する．

◆Diagnosis, Description, Remarks, Localityなどの項目は著者は自由に使うことができる．項目の行頭は1段落とし，項目名はイタリックとし，ピリオドと横線（－）に続けて文章を記す．

◆以下に記入例を示す．

……

Superfamily Rotaliporacea Sigal, 1958
Family Hedbergellidae Loeblich and Tappan, 1961
Subfamily incertae sedis
Genus *Dicarinella* Porthault, 1970
Dicarinella hagni（Scheibnerova, 1962）
Figure 1－1～1－3

Praeglobotruncana hagni Scheibnerova, 1962, p. 219, figs. 6a－c.

Praeglobotruncana sp. cf. *P. hagni* Scheibnerova. Butt, 1966, p, 174, figs. 2a－c（not 1a－c, 3a－4c）.

Globotruncana kupperi Thalmann. Marianos and Zingula, 1966, p. 340-341, pl. 39, figs. 6a-c.

Dicarinella hagni（Scheibnerova）. Robaszynski and Caron, 1979, p. 79－86, pl. 56, figs. 1a－c, 2a－c, pl. 57, figs. 1a－c, 2a－d; Caron, 1985, p. 45, figs. 18.2a－c, 3a－c.

Remarks.－This species resembles to.....but differ from.....

Hypotype.－KZG No. 0000.

Locality and Horizon.－The hypotype specimen is from..... middle part of Takinosawa Formation.

Dicarinella imbricata（Mornod, 1950）
Figure 1－4

Globotruncana（*Globotruncana*）*imbricata* Mornod, 1950, p. 589－590, figs. 5（III a-d）.

Dicarinella imbricata（Mornod）. Robaszynski and Caron, 1979, p. 87－92, pl. 58, figs. 1a－c, 2a－d, pl. 59, figs. 1a－c, 2a－c; Caron, 1985, p. 45, figs. 18.4a-c, 5a-c.

Remarks.－This species is……..

Locality and Horizon.－The hypotype specimen is from sample SRN－101, middle part of the Takinosawa Formation, middle Turonian.

……

研究室のミニ工場

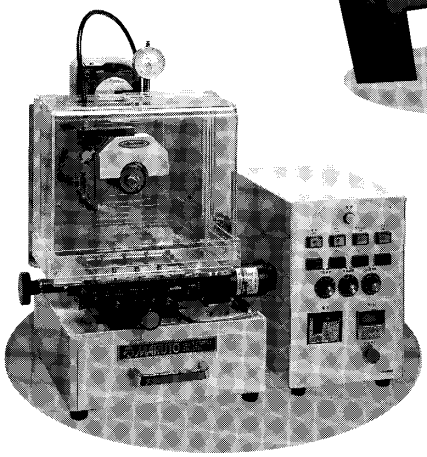
マルトーの ラボ・ファクトリープラン 3点セット

分析・検査用試料作製機器
〈切断・研削・研磨〉

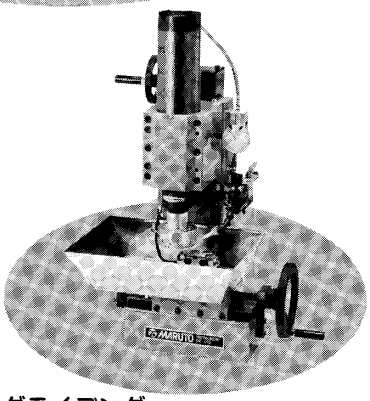
小さな機械(なり)だが役に立つ

小型 精密 操作簡単 低価格

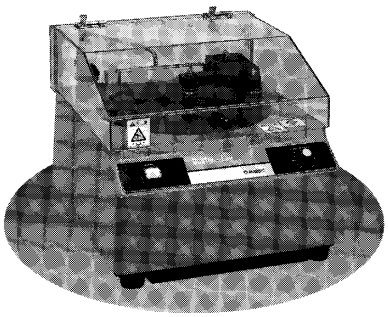
3機種揃えば、各種試料の精密加工が可能です。
(ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工)



カッティング
連続・浅切込みができる
ステップカッター
〔MC-170Y〕
- 試料へのダメージが少ない
- 最小切込み量 10μm／pass
- 最大加工能力 H25×L40mm
- 設置面積 W550×L450mm
- 本体価格 185万円～



グライデング
立軸平面研削機
プレパラップ
(MG-300)
- 最小切込量は、0.01mm目盛
- 加工サイズは、MAXφ50mm
- 任意研削面の逐次観察が可能
- 研削・研磨、同一治具使用により、研削・研磨工程は簡単で高精度
- 設置面積 W560×L380×H640mm
- 本体価格 98万円～



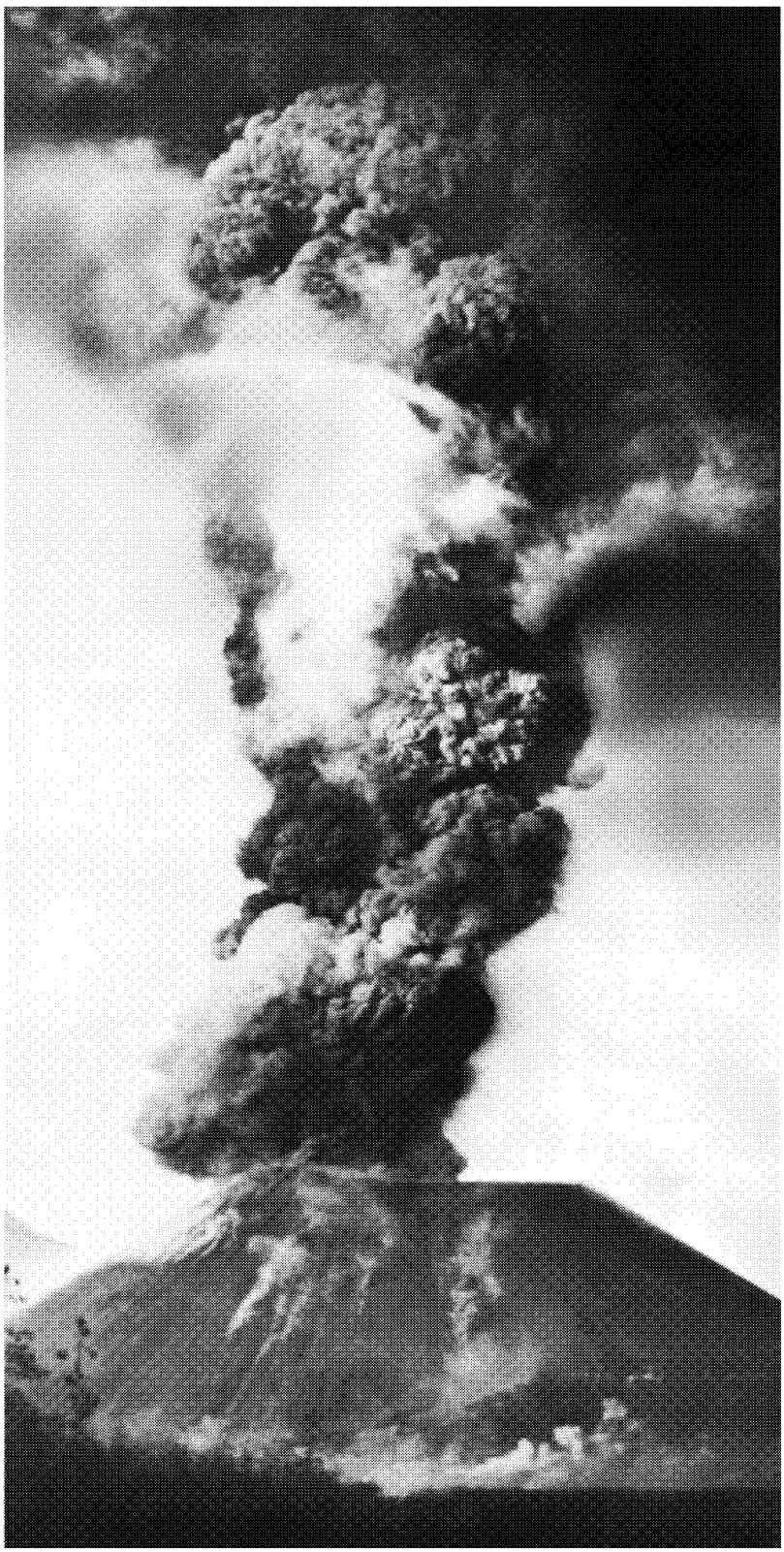
ポリッシング
精密鏡面研磨機
ドクターラップ
〔ML-180〕
- 組織検査用試料のラッピング・ポリシング
- アクセサリー豊富
- 研磨試料サイズ φ1～φ100mm
- 設置面積 W400×L400mm
- 本体価格 45万円～

☆貴重な試料を無駄なく手軽に加工したい、各種カタログあります。開放実験室でテスト加工が可能です。

材料を切る・削る・磨くそして測る技術で奉仕する

株式会社マルトー
本　社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10
☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル
☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288
E-mail:maruto@maruto.com http://www.maruto.com

READING THE ISOTOPIC CLOCKS



地質年代の測定

御社の調査・研究に必要とされる信頼出来るデータおよび特別なご注文については、経験と実績の豊富な当社へおまかせ下さい。

- K/Ar 年代測定
- Rb/Sr 年代測定
- ^{14}C 年代測定
- 堆積速度の査定
  (^{210}Pb, ^{137}Cs, ^{7}Be)

堆積速度の査定についての詳細は下記のURLをご参照下さい。
http://www.iadc-dredging.com/terra-et-aqua/2000/78-4.htm

- Boron11/10同位体測定

ジオスペース・サイエンス株式会社

〒170-0013
東京都豊島区東池袋1-20-2
池袋ホワイトハウスビル　620号
TEL03-5950-3661 FAX03-5950-3662
E-mail:sales@geospace.co.jp
http://www.geospace.co.jp/